

SPIRAL

Annual Report

2015

30th Anniversary

Exhibition

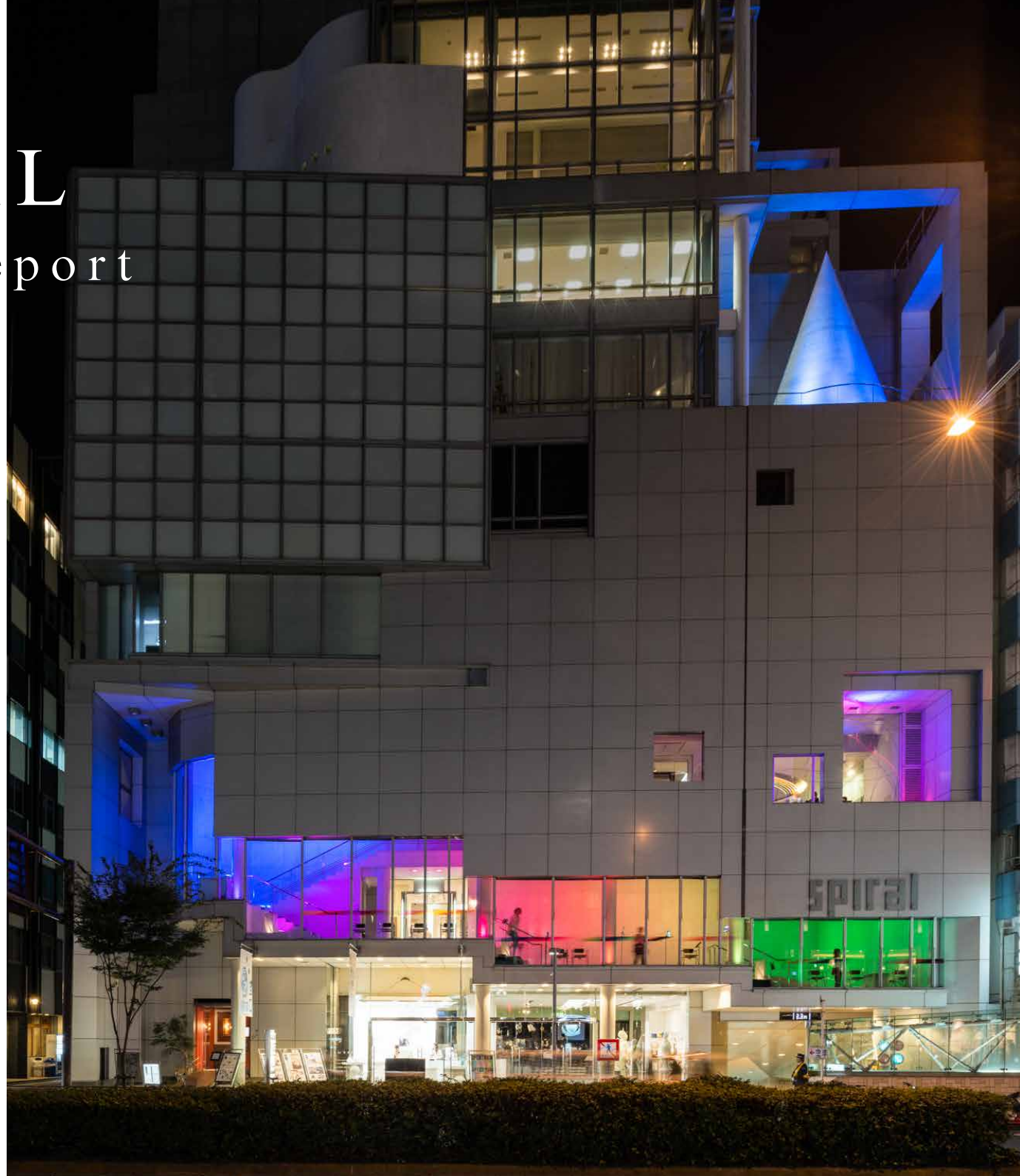
Dance / Performing Arts

Lecture & Workshop

Music

Shop

Produce



SPIRAL

Annual Report 2015

スパイラル活動報告2015

INDEX

30周年 — 30th Anniversary

- 2 ● スペクトラム イントロダクション
- 4 ● スパイラル30周年記念事業展覧会
スペクトラム — いまを見つめ未来を探す—
- 12 ● スパイラル30周年記念パーティ
- 13 ● スパイラル30周年記念プロモーションツール
- 14 ● 多様なゲストキュレーターが選ぶそれぞれの「スペクトラム」
スペクトラムファイル Spectrum File

展覧会 — Exhibition

- 34 ● ミナ ペルホネン20周年×スパイラル30周年記念
ミナ ペルホネン展覧会『ミナカケル』
- 36 ● SICF16 第16回 スパイラル・インディペンデント・クリエイターズ・フェスティバル
- 37 ● SICF16 グランプリアーティスト展 神楽岡久美『光を摘む』
- 38 ● Nature Creations -Flowers-
Botanical motifs in art, craft and design by Japanese creators.
- 40 ● the art fair +plus-ultra 2015 ジ・アートフェア +ブリュスーウルトラ 2015
- 41 ● Dimensions
- 42 ● SPIRAL BOOK GARDEN -Picture Book & Poem-

レクチャー & ワークショップ — Lecture & Workshop

- 44 ● スパイラルとワコールの共同企画 Spiral Schole
- 45 ● 横総合計画事務所創立50周年×スパイラル開館30周年記念シンポジウム
「建築家とは何者か」

ダンス／パフォーミングアーツ — Dance / Performing Arts

- 46 ● スパイラル30周年特別企画
山口小夜子主演舞台『忘れな草』上映会
- 47 ● スパイラル 聲明コンサートシリーズ vol.24 「千年の聲」螺旋曼荼羅海会
- 48 ● ロサンゼルス／東京 国際共同プロジェクト
TOUCH OF THE OTHER — 他者の手—
- 50 ● DanceNewAir2016 プレ公演 サイトスペシフィックシリーズ vol.1
“distant voices - carry on” ～青山借景

音楽 — Music

- 52 ● 林 正樹《Pendulum》
- 53 ● 藤本一馬《FLOW》

販売 — Shop

- 54 ● MINA-TO (ミナト) オープン
- 55 ● 「+S」SpiralMarket 銀座 オープン

プロデュース — Produce

- 56 ● SPORT×ART (スポーツ・バイ・アート) 新豊洲アート広場
- 58 ● WOOD FURNITURE JAPAN AWARD 2016
～ Harmonia 共鳴するものづくり～
- 60 ● 象の鼻テラス
- 61 ● SLOWLABEL SLOW MOVEMENT -The Eternal Symphony 1st mov.-



スペクトラム

2015年、30周年を迎えたスパイラルの活動は「スペクトラム」をコンセプトに、展覧会、サロン（トーク）など、様々なイベントを展開しました。

「スペクトラム」とは、英語で“連続体”や“領域”、プリズムを介して生じる色彩の配列を意味します。今日の日本では、現代美術、音楽、ダンスなどの既存の表現の垣根を超え、国籍も世代も問わず、領域横断的に創作をする全く新しいクリエイターが多数認められています。こうした各所で発生するいまだ評価の定まらない取り組みを、そのあり様から「スペクトラム」と称して、ひとつのムーブメントとして紹介します。

いつの時代も、異彩を放つ才能の切磋琢磨の中から新たなクリエイティビティは産まれ、連綿と引き継がれていきます。いま、急激に活発化するクリエイターたちもまた、新時代を切り開いていく力になると信じ、彼らとともにスパイラルも新しい価値創造に取り組みます。それが不安な社会情勢に苛まれる私たちの暮らしに豊かさとまだ見ぬ美しさ、そしていつの日か平和をもたらすと信じています。

Spiral is celebrating its 30th anniversary in 2015. To mark the milestone, over the year it will be hosting a series of exhibitions, salons and other events inspired by the theme of "spectrum."

The word 'Spectrum' itself has many contexts; beliefs, social, political, scientific or artistic. In a similar way, today in Japan many creative talents are emerging with vibrant interdisciplinary and crossover work that employ bold new kinds of methodologies. Their innovative work transcends the definitions of nationality or generation, and the pre-existing fields of artistic expression like contemporary visual art, music, and dance. We will showcase these diverse structures still in flux, grouping them together as a movement we call a "spectrum."

Across history we can see that the next generation of art and design talent is born out of competition between the creators who demonstrate new and unusual flair. We believe that the seriously active artists and designers are the key pioneers who can develop culture and society for the future. Spiral works together with these artistic talents to present new forms of creativity. The values that emerge from these have the potential to deliver fresh expressions of beauty and even peace, enriching our lives in these uncertain times we live in today.



スパイラル30周年記念事業展覧会

スペクトラム —いまを見つめ未来を探す—

2015年10月に30周年を迎えたスパイラルは、開館30周年を記念し「スペクトラム —いまを見つめ未来を探す」展を開催しました。時代の流れを見つめ、アートと向かい合った30年。スパイラルは、「生活とアートの融合」という活動テーマの元、異なるジャンルと捉えられてきたものを掛け合わせることで、新たな価値を生み出してきました。

「スペクトラム」とは、英語で“連続体”や“領域”、プリズムを介して生じる“色彩の配列”を意味します。光はプリズムにより多彩な色に分離できますが、色と色の間に境界はありません。クリエイションの先端を走る才能たちも、テクノロジーや表現技術の進展により、現代美術、音楽、ダンスなどの既存のありとあらゆるボーダーを超え、国籍も世代も性別も問わず立場を超え、活動領域の連続体の上を自由に動き回り表現を追究しています。

本展では、現代の窮屈な日常や、時代の閉塞感に立ち向かい、表現領域にとらわれることなく、多様な文化、思想、表現を吸収しながら新しい価値を提示する、栗林隆、榊原澄人、高橋匡太、毛利悠子の作品を展示しました。そして4人の現代詩人（谷川俊太郎、カニエ・ナハ、三角みづ紀、大崎清夏）によって4作品それぞれに向けた詩作を行ないました。

会期中には、出展作家のトークをはじめ、年齢、性別、国籍、障害の有無などを超え、多様な人々が協働でパフォーマンスを完成させる作品など、様々な関連イベントを開催しました。

開催概要

会期：2015年9月26日（土）～10月18日（日）

会場：スパイラルガーデン

主催：株式会社ワコールアートセンター

コキュレーター：金澤 順

コミュニケーションディレクター：細川麻沙美

会場構成：土井伸朗（スープ・デザイン）

技術協力：金築浩史

協力：株式会社トベ商事、有限会社藤山商店、カラーキネティクス・ジャパン株式会社、
一般社団法人日本流行色協会、株式会社中川ケミカル、HIGURE 17-15 cas

企画制作：スパイラル

写真：表 信匡

Spiral 30th Anniversary Exhibition

Spectrum: Examining Today, Searching for the Future

September 26th - October 18th, 2015

Spiral Garden (Spiral 1F)

Spiral opened in the Aoyama district of Tokyo in 1985 as a unique hub fusing lifestyle and art. In October 2015, it celebrates its 30th anniversary with the exhibition "Spectrum: Examining Today, Searching for the Future."

A spectrum means a band of colors, which is created by passing light through a prism. While we can separate diverse colors with the aid of a prism, here are actually no exact borders between them. In a similar way, leading creative talents are today freely engaging in interdisciplinary experiments in pursuit of new artistic fields that transcend conventional boundaries.

This exhibition showcases the work of four such artists presenting new values for culture, thought, and expression. Their unique perspective and artistic style illuminate invisible urban systems and the energy around them, as well as how humanity exists amid this complex vortex. Their pioneering work tackles the constraints of daily life and the limitations of the modern age, partnering with Spiral's efforts to engage with creating new values for our society today.



本道也一發——大膽演進

[illegible]

6



色即是空のスペクトラム 高橋匡太への敬慕——谷川俊太郎

では黒から始めてみようか
黒から始めるには勇気が要る
黒は暑い 黒はこの世からの出口だから
いやだからこそ黒を入りにすることから始めなければ

果は混雑

そこには未分化なこの世のあらゆるものがひそんでいる
そこから始めてどこへ行こうとするのか
聞かす光への決まり文句をお前も辿るうというのか

それが私たちホモサピエンスと呼ばれる哺乳類の一種の時空の始めから与えられた自然というものだ。闇が光へと啓明しようとするように黒は白へと向かうその目くるめく道程にこそあらゆる（色）が出現するのだ。

死者の国は知らない

だが生者の国で色は限りない
どんなに織物に名を考えよう

言葉は動き続ける色の階調のすべてを名付けることは出来ない

画布に塗られたとりどりの色に

夜の街の数え切れない光のきらめきに

それらを置く黒よりも恐ろしい白があることを知っているか

画家は白に線を描き形を生み出し色を置く

詩人も恐れけもなく白紙に文字を記し世界を意味で覆う
星は太陽の光　夜は星明かり　そして背徳のあの恐ろしい閃光
宇宙から視覚を恵まれて人は脳を唯一の宝としたが

朝の薄明　夕の薄明に
おののきながら曉は和む

ためらいながら光へと身を任せるとき
生は死と穏やかに和解して

意味を超える存在の安らぎに人は目覚めるだろう

まろゆと鼎は眞鍮である

土に生まれたので

かわりに

自分の分が本人

ゆえに我々

• 2018

放出された光は

外縁となり
閉ぢます

互いに
密着に隣接してい

点灯していること
目覚めなければ

命々に送られて

すべての生命の活

图6-9-2 练习用

背景には、

深い赤土な地

みやくみくとう

牛乳の成分と乳
牛の飼育法

万は幾何の寸山
 へまきき

名前をつけてみた。

丁
夕
代

を調度つけると

なまなましく

はつちへ

離に上がり、私は

しのびこみました。

以上、食料の節約より

栗林 隆《Vortex》

黒いフレコンバッグの社で、
見えないものと向き合う。

栗林隆は、原子力事故により出現した、フレコンバッグが積み上げられた光景からこの作品を着想しました。半減期が30年以上という放射性物質を含んだ土を扱うにも関わらず、3年程度しかもたない素材でできたバッグを使っている状況、そしてその圧倒的な物量に衝撃を受け、栗林は人間存在を深く見つめ直すことになります。これまでとは異なる着想から生み出されたこのインスタレーションは、昔から複数の宗教がたえず主題の一つとしてきた、見えるものと見えないものについての、栗林によるひとつの応答です。

見る者を威圧するフレコンバッグの立方体は、イスラム教のカアバ神殿のような、崇高で触れ難いものを内包した建築物を思い起こさせるでしょう。その黒い壁にブロックされるように、中にあるものは姿を隠されています。私たちはそれを見たい欲望にかられ、一部壁が開かれた場所から覗き見ることになり、そこに光を放つガラス文字のシャンデリアを発見するでしょう。実はその文字はアインシュタインがルーズベルトに送った、原爆の開発許可を求める手紙の文章です。しかし鏡文字になっているためよく読みません—— 私たちがそこに語られている言葉を読むには振り返って影を読まなくてはならないのです。

目に見えないもの、見い出されたもの、隠されたもの、そして私たちの見ることに対する欲望と、見たくないものに対する忌避が生み出す渦の中で、この作品は引力の中心に生成する虚空のように、厳然とたたずんでいます。あらゆる対立のどちらの極にも振れない強さを、私たちに知らしめるように。

Takashi Kuribayashi
“Vortex” (2015)

Confronting the invisible at a shrine of black flexible containers

Takashi Kuribayashi conceived this artwork when he witnessed the scenery of so-called “flexible container” bulk bags piled up after the Fukushima nuclear disaster. Even though they are handling soil containing radioactive materials with a half-life of over 30 years, the bag materials themselves only last 3 years. Kuribayashi’s shock at this, as well as the sheer volume of the materials, inspired him to re-examine humanity closely. Created out of a concept distinct from his previous work, this is the artist’s response to the question of what is visible and what is invisible, a constant theme in multiple religions since time immemorial.

The cuboid flexible containers oppress the viewer, perhaps evoking architecture that encompasses the sublime and the intangible, such as the Kaaba, the sacred Islamic site. Inside, something is hidden, like it has been blocked off with a black wall. We are gripped by the desire to see it and, by peeping from a place where the wall is open, discover a chandelier of glass words that emit light. These are sentences from a letter, sent by Einstein to Roosevelt requesting permission to develop the atom bomb. But since it is mirror writing, we cannot read it clearly. To read what the words are saying, we have to turn and “read” the shadows.

Within the vortex produced by our desire towards what is invisible, what is revealed, what is hidden, and what we see, and our avoidance of what we do not want to see, this artwork lingers authoritatively, like a void engendered in the center of gravity. It is like it is alerting us to the strength of being swayed by neither pole in a confrontation.

作品：栗林隆《Vortex》(2015)

詩作：栗林作品へ向けた詩人・三角みづ紀による詩「Vortex」



毛利悠子《アーバン・マイニング：多島海》

街路灯の鯨が泳ぎ、
島々がチカチカと交信する海から、
豊かな世界が立ち上がる。

ここにある古い街路灯は、LED照明への切り替えによりお払い箱となったもので、つい最近まで東京で使われていたものです。それぞれの過ごした長い年月を物語る、無数の小さな傷や変色があるその大きな体は、まるで鯨か、太古の首長竜の標本をほうふつとさせます。地中に埋め込まれて普段は見えないケーブルが、私たちの目の近く、水平に吊るされた根元から伸び、展示台の空き缶キューブと接するたびに、街路灯はつかの間、蘇ったかのように光るのです。

隣には彫刻にしつらえられたミニチュアの街路灯が、同じ構造によって光るようになっています。モールス信号のように光を出すこの彫刻群を、毛利は島々の連なる地形、多島海（アーキペラゴ）になぞらえました。古代ギリシャ文化をはぐくんだ地中海の島々のように、互いに異なる社会を形成しつつも、交流し連帯する独特の調和がそこにあります。

毛利は世界を形成するインフラやシステムに関心を持つ作家で、素材や回路の交換によって普段は隠されているその存在を明るみに出します。今回使われた空き缶はスパイラル・カフェから提供されたもので、廃棄される工業製品の象徴でもあります。作品の中では電気を伝えるトリガーにもなっています。空き缶が素材になり、エネルギーを媒介し、街路灯の光が生命や信号のように見えるとき、廃材の再利用といった素材の循環だけでなく、イメージの循環が起こっていることに気づくでしょう。大きな鯨が泳ぎ、島々がチカチカと交信する海から、物質的にも精神的にも、尽きせぬリソースの宝庫としての世界が立ち上がってきます。

Yuko Mohri

"Urban Mining: Archipelago" (2015)

A rich world emerging from swimming streetlamp whales and a sea of flickering, signaling islands

These old streetlamps were used in Tokyo until relatively recently, before being discarded when street lighting switched to LEDs. The large objects, with their numerous small scratches and discolorations, each telling the story of their long life, evoke whales or some sort of specimen of a prehistoric plesiosaur. When the usually invisible underground cables stretch out from roots hanging horizontally before our eyes and connect with a cube of empty cans serving as the exhibit base, the streetlamps illuminate for a brief moment, almost as if they have been resurrected.

The miniature streetlamps nestling next to the sculptures are illuminated in the same way. With this cluster of sculptures, blinking like they are transmitting Morse code, Mohri traces an archipelago, formed out of linked islands. Like the islands of the Mediterranean that cultivated classical Greek culture, here we can see a unique kind of harmony of interchange and association that forms mutually different societies.

Mohri is an artist with an interest in the infrastructure and systems that shape our world, and, through exchanging circuits and materials, she illuminates what is ordinarily hidden. The empty cans were supplied by a café at Spiral and, while a symbol of waste manufactured goods, in the artwork they also form the trigger for transmitting electricity.

The empty cans become a material, a medium for energy, while the light from the streetlamps looks like a signal or life. At this point, we realize that this is a cycle of images, not merely the cycle of materials that is appropriating waste for another usage. These large whales swim in a sea of flickering, signaling islands, from which a world emerges as an endless repository of material and spiritual resources.

作品：毛利悠子《アーバン・マイニング：多島海》（2015）

詩作：毛利作品へ向けた詩人・カニエ・ナハによる詩「多島海のための舞踏会をめぐる三十の断章あるいはダンス・ショウ」



榊原澄人《Solitarium》

大きな世界の中の、
無数の私たちのあり方を思わせる、天球のスクリーン。

都市の向こうにはみ出した巨人の死体、下を向いて一列に歩く灰色の人々、大きな口を開いてホームに入ってくる電車、本を読む脳に鞭をあてる人。悪い夢のような光景が次々と繰り広げられる〈Solitarium〉は、あらゆることが起こりうる大きな世界の中の、無数の私たちのありようを思わせます。

榊原澄人は心象風景を画面に点在する多数の人物像で表現する作品で知られます。今回の作品で彼は自身の頭の中にある狂氣的なビジョンを、頭蓋のメタファーである天球状のスクリーンの上にアニメーションとして映し出します。各部分の動きを作ってから一つにつなげるのではなく、すべてのディテールを一枚の絵に描き出すという途方も無い方法で、さまざまな事象が同時多発的に発生し、循環していくさまを表現しました。

12秒で一巡する各所の動きは奇跡のように別の動きに連結し、分断されたと思うと少し離れたところで再生していきます。例えば、生気を吸いこんだ木は天へと伸び上がり、そのエネルギーは花を咲かせながら大気と混ざり、矩形の影を形成した後、ビルとなって顕れます。ビル群はベルトコンベヤーのようにぐめき、高速道路を流れ続ける車や屠殺場から運ばれる肉、エスカレーターに乗る人々の動きと連動していきます。一方で木や自然のエネルギーは、弧を描いて飛び続ける鳥達、病院から飛び出す人魂、飛び跳ねる妖怪たちと共鳴しています。すべてのものがつながり、影響し合う円形の世界観は、私たちが抱きがちな線状の人生観をとびこえ、生死の概念をも包括する社会的な生態系を示しているのです。

Sumito Sakakibara
"Solitarium" (2015)

A spherical screen, evoking humanity's infinite workings in a vast world

A giant corpse protrudes out from the other side of a city. Ashen figures walk in a column, their faces always cast down. A train with a large mouth at one end pulls into a platform. A man whips a big brain, which lies on the ground reading a book. "Solitarium" unfolds like a nightmarish landscape, evoking the infinite workings of humanity in a vast world where all manner of thing can occur.

Sumito Sakakibara is known for his artworks that express an imagined landscape through numerous figures scattered around a surface. In this work, Sakakibara projects a wild vision in his head as an animation onto a globe-shaped screen that forms a metaphor for the cranium. Rather than creating each individual piece of movement and then connecting them together, his methodology was a more extraordinary one: depicting all the details in a single picture, through which various things arise simultaneously and frequently in a cycle.

These 12 seconds of movements link almost miraculously with another set of movements, replaying just when you think the scene has divided in a place slightly further away. For example, a tree sucks in breath and stretches up to heaven; the energy causes flowers to bloom and intermix with the air, forming a rectangular shadow that then manifests as a building. Buildings wriggle like a conveyor belt, interlocking with cars flowing along a highway, meat being transported from the slaughterhouse, or people riding an escalator. On the other hand, the energy of trees and nature resonates with the birds soaring in an arc, the will-o'-the-wisps flying out of a hospital, or the gamboling sprites. This worldview, where everything is connected as a circle of constant interaction, transcends our prevalent linear view of life, revealing a social ecosystem that encompasses concepts of life and death.

作品：榊原澄人《Solitarium》(2015)

詩作：榊原作品へ向けた詩人・大崎清夏による詩「永遠と一日」



高橋 匡太

《いつかみる夢「散華」》(約12分)

30年の流行色のスペクトラムで、
いつかの気分を思い出す小さな旅へ。

様々な色に染められた空間の中、点在する小さなスクリーンには、今あなたが見ている場所が映し出されています。しかしそこには現実の風景にはいない人物が、花びらを撒きながら階段を上り下りしています。これはいつの光景でしょうか——過去、それとも未来？

この空間の色は日本流行色協会(JAFCA)による過去30年間の流行色を基にしたものです。流行色は非常に繊細にその時々の人々の気分を反映しています。例えばスパイラルができた1985年頃の代表的な流行色はモノトーンとビッドカラーを基調とする、黒、赤、オレンジ、フューシャピンクなどだったそうで、経済が活況を呈し、DCブランドがブームとなったゴージャスな気分を思い起こさせます。バブル崩壊、地下鉄サリン事件など不安の募る出来事があり、環境問題が取り沙汰された1990年代前半には、地球の青を想像させるネイビーブルーやライトブルー、ナチュラルカラーが流行色になり、それは自然への帰帰を連想させます。また東北大震災の起こった2011年にはパンプキンイエロー、オレンジ、スキンカラーなどグラデーションを作る色調が設定され、つながりや変化のイメージをもたらしました。

時代とともに過ぎ去っていく私たちの気分は、かつて確かにそこに存在したものです。高橋匡太が満たす色彩の空間は、私たちがいた過去のある時点へ私たちを連れ戻します。スクリーンに映し出された人物は時空間を旅する私たち自身のメタファーです。その人物は花びらをまき、過ぎ去った出来事や心の奥底で追想するとともに、いまこの瞬間を祝福しているのです。

Kyota Takahashi

"A Sometime Dream: Shower of Petals" (2015) [about 12min.]

A small journey evoking ephemeral feelings across a 30-year spectrum of fashion colors

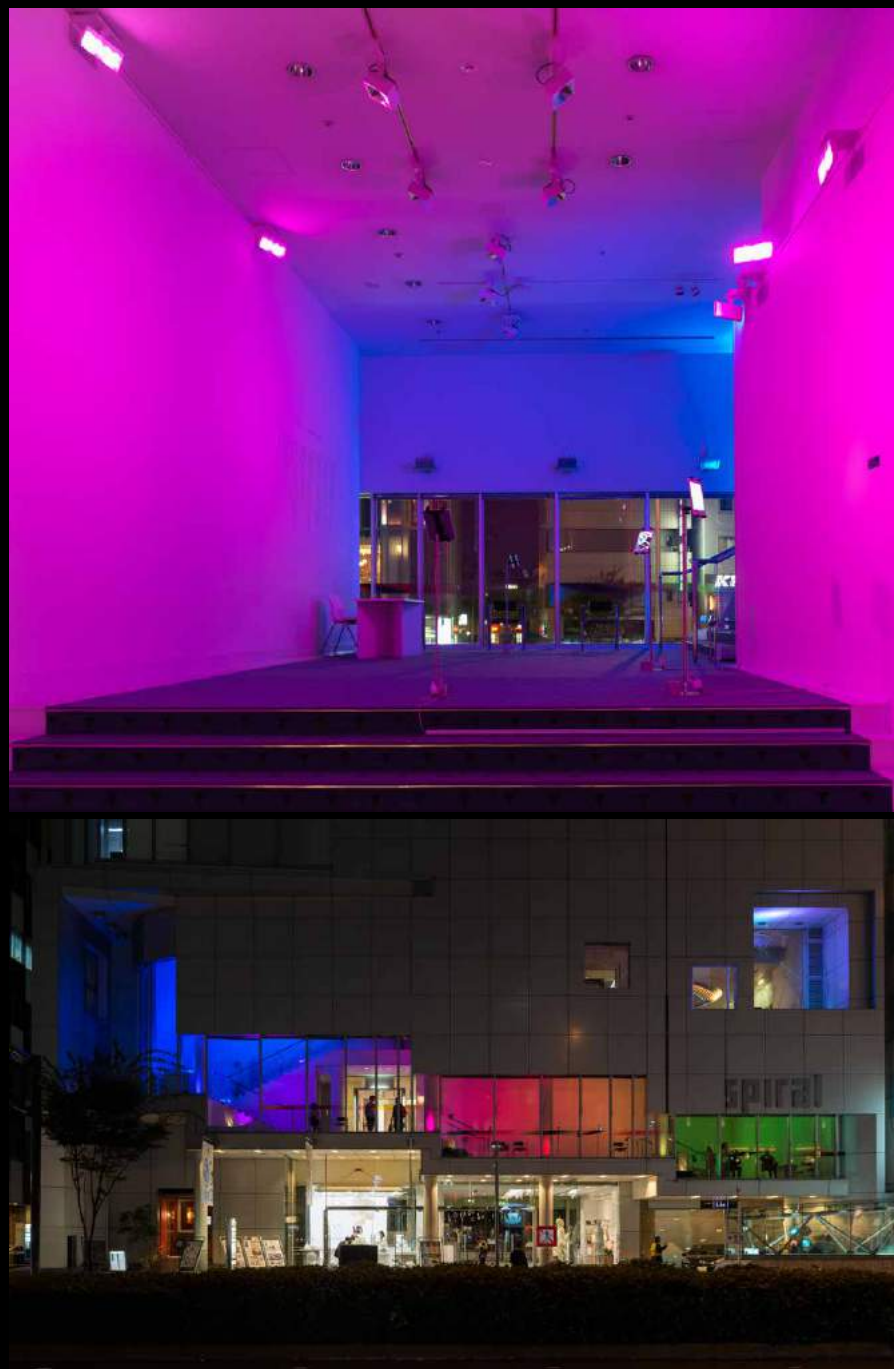
On small screens scattered around a space dyed with all manner of color are projected the very place the visitor is viewing. However, there is also a figure that is not present in the real landscape, ascending and descending stairs while scattering petals. When is this landscape? Is it the past? Or is it the future?

The colors in the space are based on the "fashion colors" identified by the Japan Fashion Color Association (JAFCA) from the past 30 years. These fashion colors very delicately reflect the feelings of people from those times. For example, around 1985, when Spiral opened, the representative colors were monotonous and vivid colors like black, red, orange, and fuchsia, which demonstrate how it was a time when the economy was booming and evoke the flamboyance of when Japanese apparel companies were really popular. But in the first half of the 1990's, many things happened that caused social uncertainty, such as the collapse of the Bubble and the sarin attack on the Tokyo subway, while environmental problems were also much discussed. During this time, navy and light blue, which bring to mind the blue of the planet, and other natural colors became fashionable, evoking a return to nature. For 2011, the year of the Great East Japan Earthquake and Tsunami, there were gradation tones such as pumpkin yellow, orange, and skin color, which elicit images of connections and change.

Our feelings that pass with the passage of time did indeed previously exist in these colors. Kyota Takahashi's richly vibrant space takes us back to those points in time in our past. The figure on the screen is a metaphor for us journeying through time. The figure scatters petals, looking back on those bygone incidents in the depths of our minds while also celebrating the here and now.

作品：高橋 匡太《いつかみる夢「散華」》(2015)

詩作：高橋作品へ向けた詩人・谷川俊太郎による詩「色即是空のスペクトラム 高橋 匡太への散華」



スパイラル30周年記念パーティ

スパイラル開館30周年を記念したパーティを、記念事業の一環である「スペクトラム—いまを見つめ未来を探す」展の会場にて開催しました。

ショウケースではSICF16グランプリアーティスト展 神楽岡久美「光を摘む」、エントランスではスペクトラムファイル11「SLOW MOVEMENT」を展示。

スパイラルホールでは映像アーカイブ「マック・ザ・ナイフ」(1985)、「冬物語」(1987)、「忘れな草」(1989)、「ダムタイプ ph」(1990)を上映したほか、ダンス公演「青山借景」のプレビューを開催するなど、全館を使った記念パーティとなりました。

会場では記念品として、Spiral Paper全139号の抜粋を収録した全672ページの特別号を来場者に配布しました。

This is Dummy. Lorem Ipsum is simply dummy text of the printing and typesetting industry. Lorem Ipsum has been the industry's standard dummy text ever since the 1500s, when an unknown printer took a galley of type and scrambled it to make a type specimen book. It has survived not only five centuries, but also the leap into electronic typesetting, remaining essentially unchanged. It was popularised in the 1960s with the release of Letraset sheets containing Lorem Ipsum passages, and more rece

開催概要

日時：2015年10月7日(水)

会場：

〈スパイラル1F〉

- ・パーティメイン会場
- ・「スペクトラム—いまを見つめ未来を探す」展
展示作品：栗林 隆、高橋匡太、毛利悠子
- ・SICF16グランプリアーティスト展 神楽岡久美「光を摘む」
- ・スペクトラムファイル11 SLOW MOVEMENT

〈スパイラル3F〉

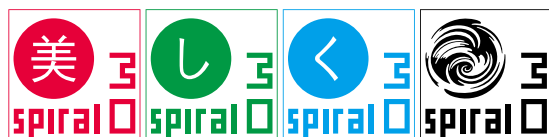
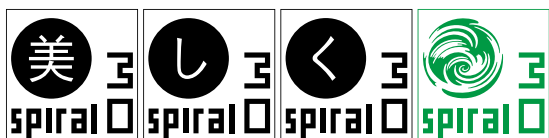
スパイラルホール

- ・映像アーカイブ放映
- ・公演ポスター展示
- ・Spiral Paper no.139 特別号配布

〈スパイラル5F〉

- ・「スペクトラム—いまを見つめ未来を探す」展
展示作品：辯原澄人





スパイラル30周年記念 プロモーションツール

「美しく SPIRAL」のロゴを用い、
30周年を記念する各種プロモーションツールを作成しました。
30周年記念ロゴは、スパイラルのオリジナルロゴデザインを手
がけた仲條正義氏が制作しました。

To commemorate Spiral's 30th anniversary, a special logo was designed
and used on many promotional tools.



01



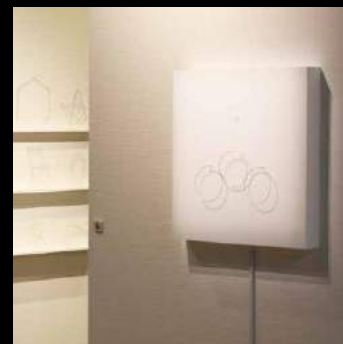
02



03



04



09



10



11



12



多様なゲストキュレーターが選ぶそれぞれの「スペクトラム」

スペクトラムファイル Spectrum File

スパイラルが提唱する「スペクトラム」という考え方に賛同する多様なゲストキュレーターが推薦者となり、彼らが選ぶアーティストをスパイラルエントランスの特設展示スペースで紹介しました。

05



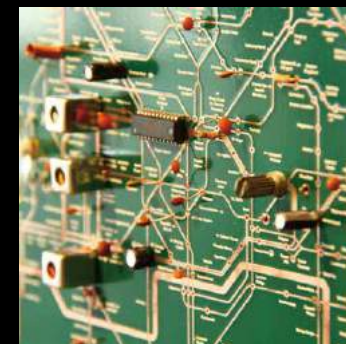
06



07



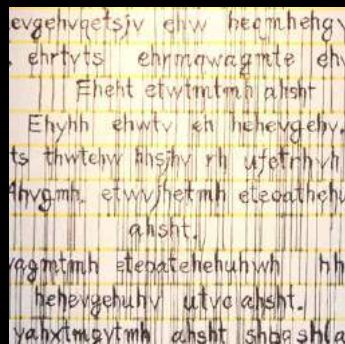
08



13



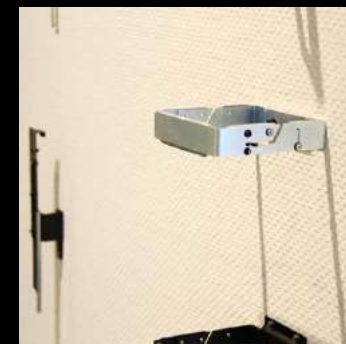
14



15



16



Spectrum File — 01 北上伸江 Nobue Kitakami

推薦者：金澤 韻（インディペンデント・キュレーター／スペクトラム展コキュレーター）

会期：2015年4月10日（金）～23（木）

推薦者の言葉

私が考える「スペクトラム」は、グローバリゼーションという現象のただ中にあります。例えば、インターネットなどにより世界中の距離が縮まること。例えば、記録媒体が発達し、また多量にあることで、タイムラインが曖昧になること。遠くものが近くなり、過去のことが今になる、その時空間の交錯が、様々なものごとを連続させていると感じます。

北上伸江はそのような交錯を見せる作家の一人です。絵画から写真、映像へと進化した光景記録の歴史を逆行するかのように、彼女は映像の信号を修行かと思われるほど時間のかかる手作業を通して、絵画が連なったようなアニメーションにします。北上の作品が鮮烈な印象を与えつつもどこか懐かしいのは、無機質なメディアを媒介に、脳に刻まれたパーソナルな記憶を取り出しているからだと思います。

アーティスト：北上伸江（きたかみ のぶえ）

大阪芸術大学で映画を専攻した後、メディアアートを専門とするIAMASで学ぶ。ロトスコープアニメーションを中心とした映像インスタレーションを主な表現手段としている。2011年文化庁メディア芸術祭京都展優秀賞受賞。2012年には中村勇吾氏が手がける「FRAMED」に参加。主な展覧会に、「セカイがハンテンし、テイク」（2013年、川崎市市民ミュージアム）、「アート・オブ・メモリー」（2015年、北九州市立美術館）など。

推薦者：金澤 韻（かなざわ こだま）

インディペンデント・キュレーター。熊本市現代美術館等での勤務を経て、2013年に独立。現在ロンドン、RCAで現代美術のキュレーティングを学びながら、グローバリゼーションの時代における美術と表現についてリサーチし、展覧会企画に携わる。代表的な仕事に「横山裕一 漫画の全記録：わたしは時間を描いている」（2010年、川崎市市民ミュージアム）、「Chu Enoki: Enoki Chu」（2015年、White Rainbow、ロンドン）、「Whose Game Is It?」（2015年、RCA、ロンドン）など。2015年、スパイラルガーデンで開催した「スペクトラム展」コキュレーター。

Nominator Text

What I think of as a "spectrum" exists inside the phenomenon of globalization. For example, the Internet has shrunk the distances between things in the world. Recording media have developed and proliferated, making the concept of the timeline ambiguous. What was far is now close; what was in the past is now in the present. This tangle of time and space makes all manner of things consecutive.

Nobue Kitakami is an artist who shows us this tangle. As if to revert the history of optical recording from painting to photography and video, she works laboriously, almost ascetically, by hand, turning video signals into animations that are like series of pictures. While vivid and striking, Kitakami's work is also somehow nostalgic, since, via an inorganic medium, it is extracting personal memories carved into the mind.

Artist: Nobue Kitakami

After majoring in film at Osaka University of Arts, she specialized in media art at the Institute of Advanced Media Arts and Sciences (IAMAS). She works mainly with video installations employing the animation technique rotoscoping. She won the Excellence Prize at the Japan Media Arts Festival Kyoto exhibition in 2011. In 2012, she took part in Yugo Nakamura's "FRAMED" project. Her major exhibitions include "Being-in-the-Wired-World" (Kawasaki City Museum, 2013) and "Art of Memory" (Kitakyushu Municipal Museum of Art, 2015).

Nominator: Kodama Kanazawa

Independent curator. After working at Contemporary Art Museum Kumamoto and elsewhere, she went freelance in 2013. She is currently reading for an MA in Curating Contemporary Art at the Royal College of Art (RCA), London, while researching into art and expression in the globalized age. Her major exhibitions include "Yuichi Yokoyama - Complete Records of Neo Manga: I am depicting time" (Kawasaki City Museum, 2010), "Chu Enoki: Enoki Chu" (White Rainbow, London, 2015) and "Whose Game Is It?" (RCA, 2015). She is also the co-curator of the special exhibition "Spectrum" at Spiral Garden in September 2015.



Spectrum File — 02 東京大学山中研究室

Yamanaka Laboratory, Institute of Industrial Science, the University of Tokyo

推薦者：松田朋春（スパイラル シニアプランナー）

会期：2015年4月24日（金）～5月4日（月）

推薦者の言葉

「生活とアートの融合」を事業コンセプトとして30年、スパイラルはアートを巡って様々な掛け算を試してきた。今は、生活とアートが別のものではなく、ひとつながりの連続体の、それぞれの位相というイメージを持っている。

生活とアートばかりではない、男と女、生と死、ヒトとそれ以外、人種、文化、社会。境界は常に曖昧だ。そして、他方がなければこちらもない、という対照的な相互依存関係がある。根は同じだとしても、別れて現れたことには意味があるだろう。

2020年には東京でオリンピック・パラリンピックが開催される。パラリンピアンとの記録が、オリンピックの記録を凌駕しはじめる大会になると予測する声がある。技術とデザインの進展は、健常/障害という境界をいっそう曖昧にしていく。

義足という美しい個性が人間をさらに強くする。

アーティスト：山中俊治（やまなか しゅんじ）

デザインエンジニア/東京大学生産技術研究所教授 1957年愛媛県生まれ。1982年東京大学工学部卒業後、日産自動車デザインセンター勤務。1987年フリーのデザイナーとして独立。1994年リーディング・エッジ・デザインを設立。2008～12年慶應義塾大学教授。2013年より現職。腕時計、カメラ、乗用車、家電、家具など携わった工業製品は多岐にわたり、グッドデザイン金賞、ニューヨーク近代美術館永久所蔵品選定など授賞多数。近年は「美しい義足」や「生き物っぽいロボット」など、人との新しい関係を研究している。

推薦者：松田朋春（まつだ ともはる）

アートプロデュースを通じて、まちづくりや観光プロモーション、商品開発、広告企画などに携わる。「道後オンセナート2014」プロデュース他。著書「ワークショップー偶然をデザインする技術」（共著・宣伝会議）「わたしの犬退治」（新風舎）他。典型プロジェクト代表。oblaat（オブラート）世話人。グッドアイデア株式会社代表。グッドデザイン賞審査委員。「TOKYO ART FLOW」アートプロデューサー。

Nominator Text

For 30 years, Spiral has experimented with a diverse range of projects based on the concept of fusing lifestyle and art. These are not two separate things; they are a single continuum possessing images of their respective phases. And not only lifestyle and art, boundaries are extremely ambiguous elsewhere too: between men and women, life and death, people and beyond, race, culture, and society. They have comparative, interdependent relationships, where one cannot exist without the other. It is surely significant that they appear separate, though the root is the same. In 2020, Tokyo will host the Olympic and Paralympic Games. Some are predicting that Paralympian records may even surpass the Olympians in some tournaments. The development of technology and design are making the boundaries between the able-bodied and the disabled more ambiguous. A prosthetic limb can give us beautiful personality and make humanity stronger.

Artist: Shunji Yamanaka

Born in Ehime Prefecture in 1957, Shunji Yamanaka is a design engineer and lecturer at the Institute of Industrial Science, the University of Tokyo. He graduated from the Faculty of Engineering at the University of Tokyo in 1982 and started working at Nissan Motors Design Center. He became a freelance designer in 1987. He founded Leading Edge Design in 1994. From 2008 to 2012 he taught at Keio University. He joined the Institute of Industrial Science in 2013. His wide-ranging industrial design output, including watches, cameras, cars, household appliances, and furniture, has won many prizes, such as Gold at the Good Design Awards. His work has also been selected for the collection of MoMA in New York. Recently, he has been engaged with new research into "beautiful" prosthetic limbs and robots that resemble living creatures.

Nominator: Tomoharu Matsuda (Senior Planner, Spiral / Wacoal Art Center)

Tomoharu Matsuda works as an art producer involved with regional development, tourism, product development, and advertising. In 2014, he produced Dōgo Onsenart in Ehime Prefecture. His writings include "Techniques in Designing Workshop Chance" and "Exterminating My Dog." He is the head of tenkei project and a manager for the design label oblaat, as well as President of Good Idea Inc., and a Jury member for the Good Design Awards. TOKYO ART FLOW art producer.



Spectrum File — 03 中山晴奈 Haruna Nakayama

推薦者：ネダ・ショーン&クリストフ・ショーン (schön und söhne 共同経営者)

会期：2015年5月5日(火)～5月24日(日)

推薦者の言葉

「スペクトラム」は、連続体、範囲、融け合う色帯、そして世界中のありとあらゆる現象を生むものと解釈できる。一方、多様でありながら相互に関連する考え方や物質といった意味もあり、それぞれに掛け合わさった個性の連なりとも受け取れる。私には、流れ行く思考、知恵、文化伝統、境界によって遮られることなく古いものを打ち壊すパワーをもった一連のものと感じられた。

中山晴奈は、表現というパレットに無限に広がりゆく作品を作っている。デザイン、フードアート、パフォーマンス、コミュニケーションを通じて、ユニークな物語を演出してみせた。繊細に丹念に計画された作品だが、とても儚い。そのわずかな時間に、文化、世代、あるいは価値や思考の交流をもたらし、作品は食されることによって跡形もなく消えていった。

*作家のスイス滞在中に地元の食材で作った乾物によるインスタレーション。本作品は、2014年にスイス・バーゼルで行われたフェスティバル「Culturescapes」にて出展された。

アーティスト：中山晴奈 (なかやま はるな)

千葉県生まれ。東京藝術大学大学院修了。地域デザインのほかフード×アートのワークショップや作品制作を国内外で行う。2012年にNPO法人フードデザイナーズネットワークを設立、2014年より食とものづくりスタジオFERMENTディレクター。

推薦者：ネダ・ショーン&クリストフ・ショーン

クリストフ&ネダ・ショーンは、スイス・バーゼルを拠点とした文化事業の企画・制作を行う「schön und söhne」の共同経営者。過去にはイベントやアートフェア制作、またコンサルなどの実績がある。代表的なプロジェクトは、スイス・タルヴィル文化センターの再活用事業、バーゼル・マーケットホール開発事業、その他シアタープログラム、サーカス、パフォーマンス・アーツなど幅広く手がける。

Nominator Text

Spectrum: a continuum, a scope, a range of colors blending into one another and thus creating a phenomenon known all around the world. Spectrum: a broad range of varied but related ideas or objects, the individual features of which tend to overlap so as to form a continuous series or sequence. For us it represents a flow of ideas, knowledge, and traditions—a flow not constrained by borders, but with the power to break conventions.

Haruna Nakayama's work stretches across the entire palette of artistic expression. Through design, food-art, performance and interaction she creates a unique narrative. Her work is delicate, meticulously planned, but short-lived. But in its very fragile lifespan Nakayama's art serves as a tool for communication between cultures, between generations, between values and ideas. The art itself is at the end consumed, thus becoming a part of every individual.

Artist: Haruna Nakayama

Born in Chiba, Japan, Haruna Nakayama graduated from Tokyo University of Fine Arts. She runs community design projects as well as food and art workshops in Japan and overseas. She established the non-profit organization Food Designers Network in 2012, and since 2014 has also served as director of FAB-and-food workshop Studio Ferment.

Nominator: Neda and Christoph Schön (schön und söhne)

Christoph and Neda Schön run schön und söhne, a small company for cultural productions, based in Basel, Switzerland. In the past they have organized various cultural events and art fairs and have specialized in creative cultural consulting. Some of their projects include: concept and relaunch of the Cultural Centre in Thalwil, Switzerland; Market Hall Basel; and numerous theatre, circus and art performance productions.



Spectrum File — 04 荒牧 悠 Haruka Aramaki

推薦者：杵村史朗（アーティストディレクター）

会期：2015年5月25日（月）～6月10日（水）

推薦者の言葉

荒牧氏の作品は、道具が道具でなくなることや、実線が生み出す空間など、生活の中で無意識に把握している曖昧な境界を表立たせ意識させます。作品たちは機能や意味の境界から生み出されスペクトラムのように投影されます。

展示作品について

『アウトラインアプローチ』—— 荒牧 悠

線で描かれた図形は、平面上に描かれた形にも関わらず、立体的に見えたり、身体的な動作を連想させたりと、読み取る側の解釈によって様々に形を変えていきます。線が平面を飛びだすと、それを手で触れて持つことが可能になり、さらには図形自体が時間を持つようになります。このとき、平面だった頃の図形としての印象を持ち続けるのか、別のものとして読み取ろうとするのか、その間を行ったり来たりさせながら、解釈を巡らせます。

アーティスト：荒牧 悠（あらまき はるか）

慶應義塾大学政策メディア研究科修了。人の無意識的な判断を露にする試みを、オブジェクトの制作を通して行っている。2013年、学生CGコンテスト評価員（谷口暁彦）賞受賞、主な展覧会に、個展「Bi&een」展（2014, No.12 gallery）「Research Portrait 01 チタン・3Dプリンティング」展（2014, 東京大学生産技術研究所）、「単位展」（2015, 21_21 DESIGN SIGHT）など。http://harukaaramaki.tumblr.com/

推薦者：杵村史朗（きねむら しろう）

ゲームを中心に、アートディレクション、ユーザーエクスペリエンス設計に携わる。ゲーム分野でコンセプトアートディレクター（兼デザイナー）として参加したプロジェクト「space channel 5」と「killer7」が文化庁メディア芸術祭エンターテインメント部門推薦作品に、「street fighter 4 trailer movie」がシネグラフィック・アジア・フィルム・フェスティバルで選ばれる。他、代表作として、詩人谷川俊太郎氏の恋愛の詩を読むiPhoneアプリ「poegram」、道後オンセナート出品作品「ふりかえる」がある。

Nominator Text

Haruka Aramaki's work brings out and makes us aware of the ambivalent borders that we unconsciously grasp within daily life, where tools stop being tools and lines create space. Her artworks are projected like a spectrum created out of the boundaries between function and meaning.

"Outline Approach" Haruka Aramaki

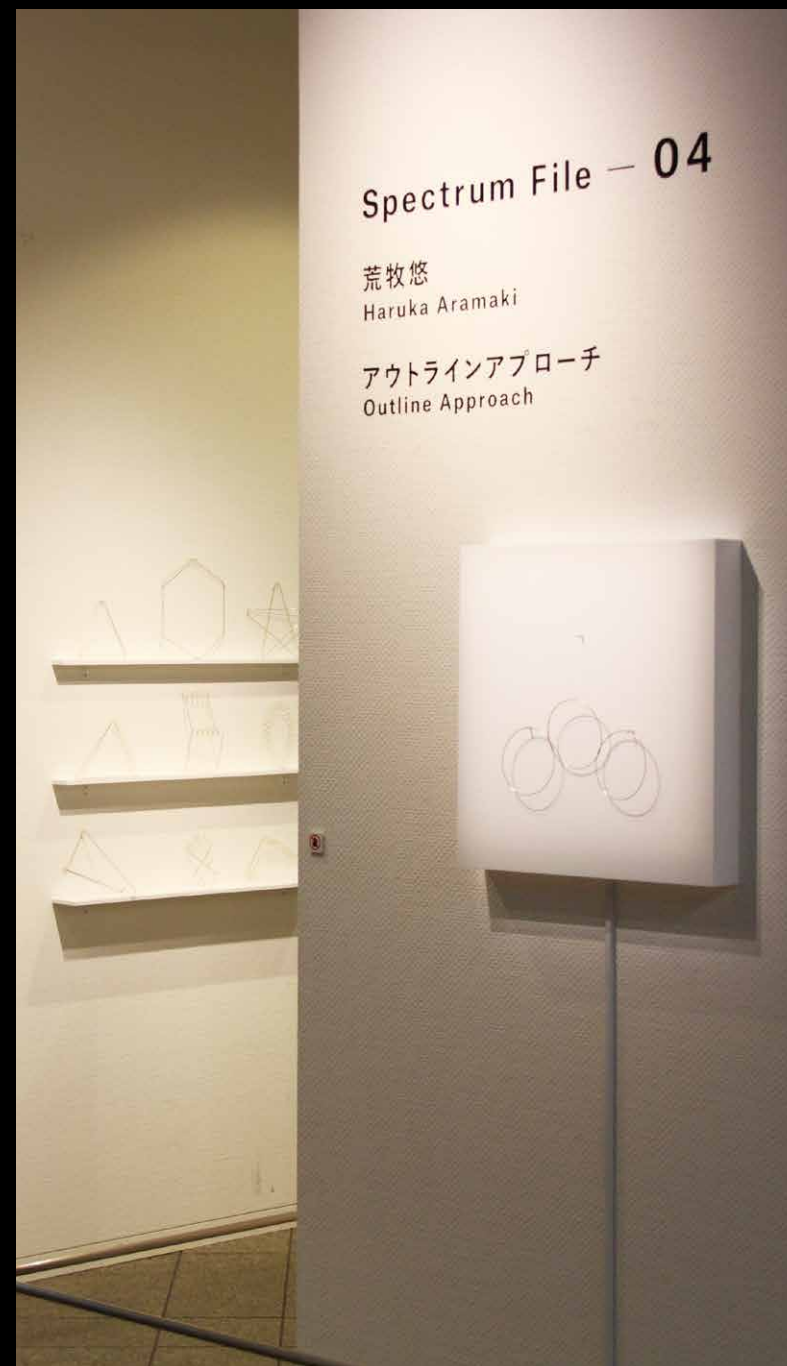
Regardless of being drawn on a flat surface, figures drawn with lines can appear three-dimensional and evoke physical actions, changing form in a variety of ways according to the interpretation of who is "reading" them. When lines jump out of a flat plane, it becomes possible to touch and hold them, and the figures themselves become temporal. At this point, do we continue to have an impression of it as a figure on a plane or do we try to interpret it as something else? This work traverses these questions and examines the nature of interpretation.

Artist: Haruka Aramaki

Haruka Aramaki graduated from Keio University with a degree in media and governance research. She experiments with exposing our unconscious judgments through creating artworks. In 2013, she won a Jury Prize at the Student Campus Genius Awards. Her major exhibitions include "Bi&een" (2014, No.12 Gallery), "Research Portrait 01: Chitan 3D Printing" (2014, Institute of Industrial Science, the University of Tokyo), and "Measuring" (2015, 21_21 Design Sight). http://harukaaramaki.tumblr.com/

Nominator: Shiro Kinemura (Artistic Director)

Shiro Kinemura is an art director and user experience designer, working mainly in the video game industry. His work as a video game concept art director and designer for "Space Channel 5" and "Killer7" were Jury Selections at the Japan Media Arts Festival, while "Street Fighter 4 Trailer Movie" was chosen to screen at SIGGRAPH Computer Animation Festival. His other work includes poegram, an iPhone app featuring the romantic poetry of Shuntaro Tanikawa, and furikaeru, which was exhibited at Dōgo Onsenart.



Spectrum File — 05 林 響太郎 Kyotaro Hayashi

推薦者：杵村史朗（アーティストディレクター）

会期：2015年5月25日（月）～6月10日（水）

推薦者の言葉

画面は平面だが投影されるものによっては、その先に何かあるのかもと思わせてくれることがあります。 昨今行われているプロジェクションマッピングも投影された向こう側もスペクトラム。画面の此方側では見えないものや景色が、画面の向こう側に分光され現れます。林氏の作品は、見えることがないと思われている音の可視化。音が空を伝って体の中に入ったとき、色や動きが目の前に浮かんだように感じられ覚えられろしたら。そんな映像を林氏の作品は見せてくれる。いつもと違うものを見る目があるとしたら、こんな風にみえるのかもと思わせてくれます。

展示作品について

『Gently 「歌声のかたち」』 — 林 響太郎

発生する音、音と音との重なりでできる音楽。形から想像する音、音の中から創造する動き、形。その美しい音に形は見出せるか。私は、プログラム制御で動く論理的な「形」ではなく、エモーショナルな感覚を追求した「音と形の関係」をRyu Matsuyamaの美しい歌声を元に「歌声のかたち」をこころみた。形が聞こえ、音が見えるこのGentlyを是非体感してみてください。

アーティスト：林 響太郎（はやし きょうたろう）

1989年東京生まれ。多摩美術大学情報デザイン学科インタラクティブデザイン専攻卒業後、DRAWING AND MANUALに参加。独自の色彩感覚で女性美を切り取る映像を生み出している。同時に3DCG、VFX、インタラクティブなメディアに精通し、音と映像の関係性について研究し、その音「らしさ」を落とし込む作品をライフワークとしている。映像のみならず写真、インスタレーション作品制作やプロジェクションマッピングのクリエイションに数多く関わっている。クリエイターとして活動と同時にソニー、ネスレなどの大手ブランド、アーティストからミュージックビデオ監督のオファーが続いている。

Nominator Text

A screen is a flat surface but, depending on what is projected on it, it can make us think there is something beyond it. The “screens” where the recently popular projection mapping events are projected are also a spectrum. Things and scenery invisible on this side of the screen are dispersed and appear on the other side.

Kyotaro Hayashi's work visualizes sound, which is thought of as something that cannot be seen. His work proposes the question of what if, when sound travels across air and enters the body, it could be sensed and felt like color and movement suspended before our eyes. This is the kind of video that Hayashi's work shows us. Perhaps this is how things would look if we could see things differently.

“Gently” Kyoutaro Hayashi

Music is created by sounds and the overlapping of sounds. Sound is imagined from form; movement and form are created from sound. Can we detect form in a beautiful sound? I have attempted to create the form of singing voices, based on the beautiful singing of Ryu Matsuyama, not as a logical form produced through computer programming, but as the relationship between sound and form in search of an emotional sensibility. Please experience this work, where you can hear both sound and form, gently.

Artist: Kyotaro Hayashi

Kyotaro Hayashi was born in Tokyo in 1989. After graduating from Tama Art University with a major in interactive design, he joined Drawing and Manual. He creates videos that extract feminine beauty with an original sensibility of color. He is also well versed in 3D computer graphics, visual effects and interactive media, and researches the relationship between sound and video. At the core of his work lies an attempt to integrate the qualities of sound. He works widely, not only in video, but also in photography, installation, projection mapping, and more. His output includes music videos and work for major corporations such as Nestle and Sony.
<http://www.kyotaro.org>

推薦者：杵村史朗（きぬむら しろう）

ゲームを中心に、アートディレクション、ユーザーエクスペリエンス設計に携わる。ゲーム分野でコンセプトアートディレクター（兼デザイナー）として参加したプロジェクト「space channel 5」と「killer7」が文化庁メディア芸術祭エンターテインメント部門推薦作品に、「street fighter 4 trailer movie」がシーグラフ・アジア・フィルム・フェスティバルで選ばれる。他、代表作として、詩人谷川俊太郎氏の恋愛の詩を読むiPhoneアプリ「poegram」、道後オンセナート出品作品「ふりかえる」がある。

Nominator: Shiro Kinemura (Artistic Director)

Shiro Kinemura is an art director and user experience designer, working mainly in the video game industry. His work as a video game concept art director and designer for “Space Channel 5” and “Killer7” were Jury Selections at the Japan Media Arts Festival, while “Street Fighter 4 Trailer Movie” was chosen to screen at SIGGRAPH Computer Animation Festival. His other work includes poegram, an iPhone app featuring the romantic poetry of Shuntaro Tanikawa, and furikaeru, which was exhibited at Dōgo Onsenart.



Spectrum File — 06 植野康幸 Yasuyuki Ueno

推薦者：栗栖良依 (スローレーベル ディレクター)

会期：2015年6月11(木)～6月28日(日)

推薦者の言葉

「ヒト」という存在は内も外も、スペクトラムなものである。しかし、忙しい現代人は、すぐにそれを属性によって分類したがる。年齢は？ 性別は？ 所属は？ 肩書きは？ その問いはさらに続き、少し歩調の異なるものに出会うと、障害か？ 健常か？ と問う。昨年「Let It Go ーありのままでー」という曲が大ヒットを記録した。今年に入り、渋谷区で全国初の「同性婚」証明条例が成立し話題となった。空気を読むことが得意で、周囲に同調することで安心を得る日本人に変化の兆しか！自然界の法則である陰陽は、白か黒ではなく、相対するものがゆるやかにバランスを取り合って、最も心地よい色を探り当てるための指標なのだと思う。その色に善し悪しはなく、ひとりひとりにとっての心地よさを、自他ともに認め合うということが正解なのだろう。その多様性の豊かさに、感謝できる社会であってほしい。曖昧さを美学とする日本が、世界に示せる美しきスペクトラムが、きっとある。

アーティスト：植野康幸 (うえの やすゆき)

1973年生まれ。大阪府・アートエコーナス所屬。05年より制作を始め、09年より「ビッグ・アイアートプロジェクト」、「ポコラート」他、公募展での入選・受賞多数。12年、abcd(仏)に作品9点がコレクション入り。主な展覧会に「千代田芸術祭3331 アンデパンダン」(アーツ千代田 3331, 2010)「アートピクニック」(芦屋市立美術館, 2011)、「第19回 LALE 国際芸術祭」(アメリカ・ロサンゼルス, 2011)「ピンクルーシュの軌跡(個展)」(ギャラリーあしたの箱, 2012)、「Paris-Osaka Sensibilite'Instinctive 展」(フランス・パリ, 2014)、「アール・ブリュット★アート★日本2」展(ボードレス・アートミュージアム NO-MA, 2015)、abce collection「アール・ブリュット展」(フランス・パリ, 2014、チェコ・ブラハ、2015)など。

推薦者：栗栖良依 (くりす よしえ)

「日常における非日常」をテーマに、アートやデザインの領域に収まらない自由な発想で、異分野・異文化の人や地域を繋げ、新しい価値を創造するプロジェクトを多方面で展開。2008年より、過疎化の進む地域で住民参加型パフォーマンス作品を制作。10年、骨肉腫を患ったことがきっかけで、右下肢機能全廃。障害福祉の世界と出会う。11年より、スローレーベル ディレクター。ヨコハマ・パラトリエンナーレ 2014 総合ディレクター。

Nominator Text

People are a spectrum, both inside and out. But today's busy people tend to categorize others straightaway by affiliation. How old are you? Are you male or female? Where do you work? What is your job? As these questions continue, any encounter with someone slightly different leads to wondering if they have a "disability." In 2014, the song "Let It Go" was a big hit. Earlier this year, Shibuya ward became the first government body in Japan to offer certificates of same-sex marriage. Are these signs of change in the Japanese, who get peace of mind from sympathizing with those around them and are skilled at reading between the lines? The Yin and Yang of the natural order are not black and white; opposing elements are gently balanced and form an index for finding the most amenable color. This color is not about "good" or "bad": the correct answer lies in mutually recognizing what is comfortable for each individual. I want society to be a place where we can be grateful for the richness of diversity. Japan's turns ambiguity into aesthetics and surely it has a beautiful spectrum to show the world.

Artist: Yasuyuki Ueno

Yasuyuki Ueno was born in 1973 and is attached to Atelier Corners in Osaka Prefecture. He started making art in 2005. Since 2009, his work has been selected for numerous public entry exhibitions and awarded many prizes. Nine examples of his work were added to the collection of abcd, an art brut institution in France, in 2012. He has exhibited at Arts Chiyoda 3331, Ashiya City Museum of Art and History, and Borderless Art Museum NO-MA, as well as venues in Paris, Los Angeles, and Prague.

Nominator: Yoshie Kris (SLOW LABEL Director)

Yoshie Kris is a producer working across a wide range of fields in art and design, engaged in uncovering the extraordinary in the ordinary. Since 2008, she has produced performances involving the local residents of depopulated regions. In 2010, she was diagnosed with osteosarcoma and lost the lower part of her right leg. This led her to encounter welfare services for the disabled. She has been the director of the brand SLOW LABEL since 2011 and also served as General Director of Yokohama Paratriennale 2014.



Spectrum File — 07 AKI INOMATA

推薦者：サンソン・シルヴァン（アンスティチュ・フランス東京 文化プログラム主任）

会期：2015年6月29（月）～7月22日（水）

推薦者の言葉

在日仏大使館での展覧会「No Man's Land」への出展を期に、制作をスタートしたシリーズである。在日仏大使館の建物は2009年に解体され、隣接する土地に新しい大使館が建てられた。旧大使館の土地は、2009年10月までフランスだったが、以後50年間日本になり、その後またフランスになるという。この話に衝撃を受け、ヤドカリがやどを引っ越しする習性へとイメージが飛躍した。

ある土地の国名が平和に変わっている事実と、自分の身体ではない借り物のやどにより見た目をガラリと変化させるヤドカリ。世界各地の都市を模したやどをヤドカリに渡して引っ越しさせることで、国境について問いたい。

アーティスト：AKI INOMATA

1983年東京生まれ、2008年東京藝術大学大学院先端芸術表現専攻修了。生き物との協働作業によって作品制作をおこなう。主な作品に、3Dプリンタを用いて都市をかたどったヤドカリの殻をつくり実際に引っ越しをさせる「やどかりに『やど』をわたしてみる」など。人間以外の生き物のふるまいに人間の世界を重ね合わせることで、私たち自身の姿を再発見しようとしている。主な個展に、「エマージェンシーズ！025 AKI INOMATA / Inter-Nature Communication」(ICC、東京、2015)、「犬の毛を私がまとい、私の髪を犬がまとう」(HAGISO、東京、2014)など。近年参加した主なグループ展に「3331 Art Fair 2015 -Various Collectors' Prizes-」(3331 Arts Chiyoda、東京、2015)、「第4回 デジタル・ショック-リアルのファクトリー-」(アンスティチュ・フランス東京、2015) など。
<http://www.aki-inomata.com/>

推薦者：サンソン・シルヴァン

2010年末よりアンスティチュ・フランス東京の文化プログラム主任を務め、ビジュアルアートを中心に、数々のイベントや討論会等を企画する。2012年より毎年2月に開催しているフェスティバル「デジタル・ショック」は、フランスのデジタル・カルチャーを紹介しながら、日本とフランスの芸術交流のプラットフォームとなることを目指している。

Nominator Text

This series started with my contribution to "No Man's Land," the exhibition held at the former French Embassy. The building was demolished in 2009, with a new embassy facility constructed on a neighboring site. The former embassy's land was "France" until October 2009, when it was restored to Japan for the next 50 years, after which it will once again become French. This story deeply affected me and evoked the image of the habitually moving hermit crab.

The country name of a piece of land changing peacefully; a hermit crab completely changing its appearance with a borrowed shelter that is not its own body: I want to question national borders by creating shelters in the form of cities around the world that move around on the back of a hermit crab.

Artist: AKI INOMATA

Aki Inomata was born in 1983 in Tokyo. She completed graduate studies in intermedia art at Tokyo University of the Arts. Her art is created collaboratively with living creatures. Her major series "Why Not Hand Over a 'Shelter' to Hermit Crabs?" see miniature cities made by 3D printer transformed into the shell of a hermit crab. Her work attempts to rediscover humanity by superimposing a human world over the behavior of (non-human) living creatures. Major solo shows have been held at ICC in 2015 and Hagiso in 2014. Recent group exhibitions include "3331 Art Fair 2015 Various Collectors' Prizes" at 3331 Arts Chiyoda and "4th Digital Shock: Real Factory" at Institut français du Japon - Tokyo.

Nominator: Samson Sylvain

Samson Sylvain has been in charge of the cultural program at Institut français du Japon - Tokyo since 2010, in particular for visual arts and special events. He has also served as program director for Digital Choc, a French-Japanese media arts festival held annually in February since 2012.



Spectrum File — 08 スズキユリ Yuri Suzuki

推薦者：田中みゆき（日本科学未来館）

会期：2015年7月23（木）～8月9日（日）

推薦者の言葉

ここ数年、障害者や障害にかかわる問題に焦点を当てた取り組みがアートの分野でも盛んになってきました。わたし自身もプロジェクトを進めるうえで感じるのは、「障害」とは本人が決めるものではなく、20世紀型の消費社会にとって不都合な人たちがそう呼ばれているのではないかということです。産業の仕組みそのものが多様性を持ち始めた現在、そういったマイノリティに目を向けることが、わたしたちの次の豊かさを考えるうえで実りあるものになるとわたしは考えます。また、障害は、「違い」を補うテクノロジーの可能性を考えるうえでも興味深い分野になりつつあります。従来の福祉の枠にとらわれず、そこに技術が親しみやすく介入することで、互いの違いを見つめ、多様なものの見方や価値観を軽々と受容させてしまう例は、今後ますます増えることでしょう。

スズキユリの『Looks Like Music』は、白いミニカーが走りながら、従来の楽譜ではなく色や図形を読み取ることで音を奏でる作品です。元々は難読症の人のためにデザインされたものですが、そこにある音のビジュアライゼーションと音を生み出す新鮮な喜びは、障害の有無に関わらず、誰もが新しい気持ちで音と向き合える作品といえます。『TUBE MAP RADIO』は、普段は外装に隠れ、一般の消費者を理解から遠ざけている電子回路を露出させ、電気の流れをわかりやすく表しています。これもまた、精神的な障壁を取り除く軽やかな例と言えるでしょう。

アーティスト：スズキユリ

1980年東京生まれ。1999年～2005年、アートユニット明和電機に携わり「音楽とテクノロジー」に関心を持ち、2005年ロイヤル・カレッジ・オブ・アート（RCA）へ入学。音楽と音がどのように思考に影響を与えるのか、音と人の関係性について提議した作品を制作し、そのサウンドアート作品とインスタレーションは、世界中の展示会に展示されている。2013年より、RCAのデザインプロダクト科にて教鞭を執り、ニューレディオフォニック・ワークショップのメンバーとしても指名されている。2014年には、DIY楽器 OTOTO が MoMA のパーマネントコレクションに選定された。

推薦者：田中みゆき（たなか みゆき）

デザインをバックグラウンドとし、展覧会の企画や書籍、印刷物の編集などに携わる。日常の中から生まれる表現に興味を持っている。21_21 DESIGN SIGHT、山口情報芸術センター [YCAM] を経て、現在は日本科学未来館に勤務。昨年より障害にかかわるプロジェクトを立ち上げ、鹿児島県の知的障害者支援施設しょうぶ学園のライブパフォーマンスや義足のアスリートたちによる「義足のファッションショー」を担当。

Nominator Text

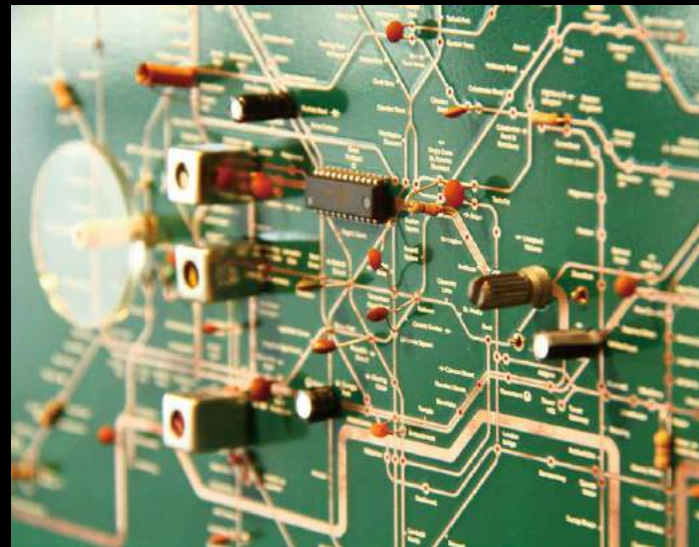
Over the past few years there have been many art initiatives focused on issues related to disability and the disabled. Being “disabled” is not something that someone chooses; it is what people deemed inconvenient to the twentieth-century model of consumer society are called. Today, as industrial frameworks themselves have started to become more diverse, turning to look at these minorities reaps meaningful rewards for considering how our society can become richer. Moreover, when we consider the further possibilities for technology to cover these differences in ability, then it really becomes a very interesting area indeed. Beyond our previous conventions of welfare, examples that, through the easy intervention of technology, examine those differences and make us more readily accept diverse perceptions and values will surely increase in the future. Yuri Suzuki’s “Looks Like Music” features white toy cars that play sounds. They do this by traveling over and reading colors and shapes, as opposed to regular musical notes. He originally designed it for people with dyslexia, though its novel way of visualizing sound and the fresh joys of sound it presents make it a lyrical example of how anyone, regardless of ability or disability, can experience new kinds of feelings by interacting with sound.

Artist: Yuri Suzuki

Yuri Suzuki was born in Tokyo in 1980. Between 1999 and 2005, he worked for Japanese art unit Maywa Denki, where he developed a strong interest in music and technology. In 2005, he moved to London to study at the Royal College of Art. Suzuki’s work raises questions about the relation between sound and people, and how music and sound affect people’s minds. Suzuki’s sound art pieces and installations have been shown in exhibitions all around the world. In 2013, Suzuki was appointed as platform tutor at the Design Products department, Royal College of Art, and was a member of New Radiophonic Workshop. In 2014, the Museum of Modern Art New York acquired his works “OTOTO,” a DIY musical instrument comprising a built-in a synthesizer and sampler, and “Colour Chasers” to their permanent.

Nominator: Miyuki Tanaka [Ithe National Museum of Emerging Science and Innovation]

With a background in design, Miyuki Tanaka works in exhibition planning, editing and publishing. Her interests lie in modes of expression created out of everyday life. After stints at 21_21 DESIGN SIGHT and Yamaguchi Center for Arts and Media [YCAM], she currently works for the National Museum of Emerging Science and Innovation [Miraikan]. Last year, she started a new project themed around disability, and was in charge of a music performance at a Kagoshima facility for the intellectually disabled as well as a fashion show for models with prosthetic limbs.



Spectrum File — 09 高田安規子・政子 Akiko & Masako Takada

推薦者：難波祐子（キュレーター）

会期：2015年8月15（土）～8月30日（水）

推薦者の言葉

色とりどりの切子の器、小人のために設えたような小さな白いマグカップ、ミニチュアのジグソーパズル…。

高田安規子・政子の生み出す作品は、その細やかな手仕事の技で私たちに魅了し、驚かせる。だが、それぞれの素材や技法に着目しながら彼女たちの作品に近づいてよく見ると、私たちは再び裏切りにも似た驚きを感じる。切子はガラスではなく、塩化ビニールの吸盤を丁寧に細工したものであり、マグカップは、陶器ではなく錠剤を加工したものであり、ジグソーパズルは、一枚の絵画に見立てた切手を精緻に切り出して作られている。

生活とアートの融合を目指してきたスパイラルのエントランスは、これまで多様な提案と情報発信を行う入口として数え切れない人々を迎えてきた。その30年にわたる活動そのものが新たな価値創造を切り拓いていくスペクトラムとして機能してきた。この象徴的なエントランスで、高田安規子・政子の作品もまた、私たちが当たり前と思っているさまざまな価値観を軽やかに覆し、異世界への入口へと誘ってくれるだろう。

アーティスト：高田安規子・政子（たかだ あきこ・まさこ）

一卵性双生児のユニットで制作活動している。身近なものに手を加えることで、モノの大きさの尺度、時間感覚などの認識に問いを投げかける作品を発表している。ロンドン大学スレード校美術学部修士課程修了後、2010年「クリテリウム 78」水戸芸術館現代美術ギャラリー、「BigMinis」ポルドー現代美術館、2013年「セカイがハンテンし、テイク」川崎市市民ミュージアム、2014年「MOT アニュアル 2014 フラグメントー未完のはじまり」東京都現代美術館、2015年「燕子花と紅白梅 光琳アート 光琳と現代美術」MOA美術館、「春をまちながら」十和田市現代美術館、「線を聴く」銀座エルメスフォーラム、に参加。

推薦者：難波祐子（なんば さちこ）

キュレーター。東京都現代美術館学芸員を経て、展覧会やワークショップの企画運営をおこなう株式会社 I plus N を設立。著書に『現代美術キュレーターという仕事』（青弓社）など。企画した主な展覧会に「こどものにわ」（東京都現代美術館、2010年）、「呼吸する環境—モルディブ—日本現代美術展」（モルディブ国立美術館、マレ、2012年）など。札幌国際芸術祭2014プロジェクト・マネージャー（学芸担当）、ヨコハマ・パトリエンナーレ2014キュレーター。

Nominator Text

From a colorfully faceted vessel to a tiny white cup seemingly designed for dwarves or a miniature jigsaw puzzle, Akiko & Masako Takada's work beguiles and astonishes with its deft handiwork. But examine their work closer, look at the various materials and techniques, and there comes a second astonishment, one close to betrayal. The facets are not glass, but carefully crafted PVC suction cups. The cup is not ceramic, but a processed tablet. The jigsaw is not a puzzle, but a postage stamp resembling a picture, intricately cut out.

Countless numbers of people have passed through the entrance foyer of Spiral, a venue dedicated to fusing lifestyle and art. The entrance is a gateway presenting a range of suggestions and information. Its activities over the past 30 years have functioned as a spectrum pioneering new cultural values. At this symbolic entrance, Akiko & Masako Takada's artworks delicately overturn the diverse values we had until now considered normal, inviting us to enter an alien world.

Artist: Akiko & Masako Takada

These identical twins work as an artist unit, creating work that poses questions about time and scale through the changes they make to everyday objects. After completing postgraduate studies at the Slade School of Fine Art in London, they have exhibited widely in Japan, including "Criterion 78" (2010, Art Tower Mitol), "BigMinis" (2010, CAPC musée d'art contemporain de Bordeaux), "Being-in-the-Wired-World" (2013, Kawasaki City Museum), "MOT Annual 2014: Fragments, Incomplete Beginnings" (2014, Museum of Contemporary Art Tokyo), "Iris & Red and White Plum Blossoms - Korin's Art / Korin & Japanese Modern Art" (2015, MOA Museum of Art), "Waiting for spring - Towards a landscape changing color" (2015, Towada Art Center), and "Listening to the Lines" (2015, Maison Hermès, Le Forum).

Nominator: Sachiko Namba (Curator)

curator. After working at the Museum of Contemporary Art Tokyo, she established I plus N to organize exhibitions and workshops. She is the author of the book "Curating Contemporary Art in Japan: 1950s to the Present." Her major exhibitions include "Garden for Children" (2010, Museum of Contemporary Art Tokyo) and "Breathing Atolls: Japan-Maldives Contemporary Art Exhibition in Japan" (2012, National Art Gallery, Maldives). She also served as project manager for the Sapporo International Art Festival 2014 and a curator at Yokohama Paratriennale 2014.



Spectrum File — 10 ジャズ・キットソン Juz Kitson

推薦者：キャサリン・フニョー & ダニエル・ロブソン (Arts People 共同運営者)

会期：2015年8月31(木)～9月23日(水)

推薦者の言葉

ジャズ・キットソンの作品は、真逆に思われがちな価値であふれている。美と恐怖。激しい欲求と嫌悪。生と死。人の経験知をバラバラにし、相対する要素を縫合しなおすかのように。

陶芸家として訓練を行った後、彼女は制作を通じて、新しい手法と技術を融合させ、オーストラリアの現代美術界に新星のごとく現れた。

キットソンは、自身の作品を陶芸における錬金術だと述べ、物質に命を吹き込む。磁器に石膏、ゴム、馬の毛、骨、毛糸、ロープなどを組み合わせて別の世界を内包させる。美しく、グロテスクでありながら、魅力的だ。

アート、クラフトやデザインなど、オーストラリアのクリエイティブ業界においてはまだまだこれらの定義は強固であり、レッテルとして根強く残っている。しかし一方、彼女は新世代のクリエイターのひとりとして、大胆さと高い技術をもって境界があいまいな世界観を映しだすのだ。

アーティスト：ジャズ・キットソン

1987年シドニー生まれ、現在はシドニー郊外、ニューサウスウェールズ州の中央海岸沿いに拠点を移し、中国・景徳鎮と往たり来たりしている。2009年ナショナルアートスクールを卒業、2005年よりオーストラリア、シンガポール、ロンドン、北京、ドバイなど各地で展示に参加してきた。タスマニアのミュージアム・オブ・オールド・アンド・ニューアート (MONA) ほか、豪国内、中国、ヨーロッパなど各地のコレクションに収められている。

推薦者：キャサリン・フニョー & ダニエル・ロブソン

アートとまちの人々をつなぐ活動を推進する団体「ArtsPeople」の共同運営者。シドニーのデザインセンターであるObjectにて出会い、オーストラリアのデザインを紹介する展覧会を多数制作した。主なものに、CUSP: Designing into the Next Decade and Hyperclay: Contemporary Ceramicsがある。キャサリンは日本語の堪能なキュレーターとして、日本とオーストラリアの共同開催プログラム、多世代にわたる参加型プログラムなどを企画する。ダニエルはキュレーター、ライターとして現代美術、工芸、デザインに通じ、新しい視座やビジョンを繰り広げる。

Nominator Text

Juz Kitson's work is a hotbed of contrasts. Beauty and horror. Desire and disgust. Life and death. She dissects the spectrum of human experience.

Technically trained as a ceramicist, her work boldly incorporates new methodologies and techniques, an approach that has seen Kitson burst onto the Australian contemporary art scene with gusto.

Kitson describes her process as a kind of ceramic alchemy, giving inanimate material a spark of life. She combines fine porcelain with plaster, latex, horsehair, bone, wool, and rope to create sculptures that embody an other-worldliness. They are beautiful, grotesque, and fascinating.

Kitson's work transcends definitions of 'art', 'craft' or 'design' – labels that still hold strong as ways to group, understand and prioritise creative work in Australia. She is part of a new generation of creative talent in Australia, a generation that is confident, highly skilled, and embracing of a world that blurs boundaries.

Artist: Juz Kitson

She was born in Sydney in 1987 and currently lives and practises just outside Sydney on the central coast of NSW, and Jingdezhen, China. She graduated from the National Art School, Sydney in 2009 and has exhibited regularly since 2005 in solo and group exhibitions in Australia, Singapore, London, Beijing, and Dubai. Her work is held in the permanent collection of the Museum of Old and New Art (MONA), Tasmania and numerous private collections in Australia, China, France, Germany and the United Kingdom.

Nominator: Kathryn Hunyor & Danielle Robson

They are the Co-Founders of ArtsPeople, a curatorial consultancy bringing the arts and people together. They met at Object: Australian Design Centre where they worked together on several major exhibitions of Australian design, including CUSP: Designing into the Next Decade and Hyperclay: Contemporary Ceramics. Kathryn is a Japanese-speaking curator specialising in Japanese-Australian collaborations, and participatory programs for all ages. Danielle is a curator and writer who specialises in contemporary art, craft and design, and always brings a fresh perspective and ambitious vision to her work.



Spectrum File — 11 SLOW MOVEMENT

推薦者：吉本光宏（ニッセイ基礎研究所研究理事）

会期：2015年9月24（木）～10月26日（月）

推薦者の言葉

障がいとアートの交差から新たな動きが広がっている。その重要な交差点のひとつに立っているのが栗栖良依だ。彼女がワコールアートセンターや象の鼻テラスと協働でスローレーベルを立ち上げたのは2011年。横浜ランデヴープロジェクトのディレクターとして、障がい者と企業や職人、アーティストが対等の立場でクリエイティブなもののづくりに取り組んだ。その商品は障がい者ならではの能力とマーケットをつなぐ新たな試みとして注目され、全国の百貨店などでも販売された。

それを起点に、スローレーベルの活動はファクトリー、パトリエンナーレへと続く。その延長線上にあるのが、年齢や性別、国籍、障がいの有無などを越えて、街中でパフォーマンスを繰り広げるスロームーブメントだ。障がいとアートの交差を繰り返し、新たな価値を生み出していくこと。その様はスペクトラムと呼ぶに相応しい。

東京五輪でも障がいとアートの出会いに大きな注目が集まる。2020年、栗栖の立つ交差点から何が生み出されるのか、今から楽しみだ。

アーティスト：SLOW MOVEMENT（スロームーブメント）

スロームーブメントとは、多様な人々が協働し、人や地域と繋がりがなく（多様性と調和）のメッセージを広げていくプロジェクト。詩人・三島みづ紀が書き下ろした一編の詩を、サーカスアーティスト・金井ケイスケを中心とする様々な分野のクリエイターと市民がワークショップを重ねながら、参加型のパフォーマンス作品に仕上げてます。人間の身体と先端技術融合によって紡がれるオーガニックな世界が、2020年以降の人と生命と世界の在り方を人々に問う作品です。

推薦者：吉本光宏（よしもと みつひろ）

ニッセイ基礎研究所研究理事。東京オペラシティや世田谷パブリックシアター、いわきアリオス等の文化施設開発、東京国際フォーラムや電通新社屋のアート計画などのコンサルタントとして活躍するとともに、文化政策、文化施設の運営や評価、クリエイティブシティ、カルチュラル・オリンピックなどに関する研究に取り組む。文化審議会文化政策部会委員、文化庁「2020年に向けた文化イベント等の在り方検討会」座長などを歴任。

Nominator Text

A new movement is spreading out the intersection of disability with art. Standing at one of the important points in this is Yoshie Kris. She established SLOW LABEL in 2011, in partnership with Wacoal Art Center and Zou no Hana Terrace. As the director of Yokohama Rendez-vous Project, she has engaged with initiatives where the disabled, corporations, artisans, and artists create things on an equal basis. These products have attracted attention as new endeavors linking the unique faculties of the so-called disabled with a commercial market, and have been sold at department stores nationwide.

From this genesis, SLOW LABEL has gone on to work with factories and the Yokohama Paratriennale. SLOW MOVEMENT is the extension of this, a performance unfolding in the city and transcending barriers of age, gender, nationality, and ability or disability. By repeating the intersection of disability and art, new values are born. This is certainly worthy of being called a "spectrum."

At the Tokyo Olympic and Paralympic Games, the encounter between ability and art will surely also attract much attention. In 2020, what will be created by this intersection where Yoshie Kris stands? I look forward to seeing it.

Artist: SLOW MOVEMENT

This project works to engage with a wide range of people and regions, and spread a message of diversity and harmony. It organizes workshops with creative people from many fields, such as the circus artist Keisuke Kanai, transforming verse by the poet Misumi Mizuki into participatory performances. In this work, an organic world woven by the fusion of physicality and the latest advances in technology inquires into life, the world, and humanity after 2020.

Nominator: Mitsuhiro Yoshimoto

Director of the Center for Arts and Culture, NLI Research Institute Through his consultancy work with cultural facilities like Tokyo Opera City, Setagaya Public Theatre, and Alios Iwaki Performing Arts Center, as well as Tokyo International Forum and art projects for Dentsu, Mitsuhiro Yoshimoto has engaged with research into cultural policy, cultural facility management, evaluation, creative cities, and cultural Olympiads. He has served on the Agency for Cultural Affairs' Culture Council Cultural Policy Subcommittee and as chair of the Agency for Cultural Affairs' Commission for Considering 2020 Cultural Events.



Spectrum File — 12 西尾美也 Yoshinari Nishio

推薦者：臼井ちか（有限会社チカソシキ代表取締役）

会期：2015年10月27（火）～11月13日（金）

推薦者の言葉

西尾美也の作品には、大胆な企てがユーモアをまとうて埋め込まれています。

作品には人が関わることを含めた設計がなされ、これまでも多くの人が熱心に取り組んできていますが、それは何故でしょうか？

西尾が自分でやりたいと思うことから発想し、親しみやすい工程を考え、多様な考えがあることを良しとすることから、私たちはのびのびと積極的に、作品に関わることができるのではないのでしょうか？

開かれた制作の時間を体験した人たちは、自分の生業に戻っても、他者と境のないフラットな関係を作り、物事を進めていくのかもしれない。西尾の作品は、作品を体験した人のその先も無数の色で構成されている光の帯に載せ、まだ見ぬ先へ、向かっているかのようです。

アーティスト：西尾美也（にしお よしなり）

1982年奈良県生まれ、同在住。2011年東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。文化庁芸術家在外研修員（ケニア共和国ナイロビ）等を経て、現在、奈良県立大学地域創造学部専任講師。装いの行為とコミュニケーションの関係性に着目し、市民や学生との協働によるプロジェクトを国内外で展開。アフリカと日本をつなぐアートプロジェクトの企画・運営の他、ファッションブランドFORM ON WORDSも手がける。主な個展に、京都服飾文化研究財団KCIギャラリー（京都、2006）、Gallery Cesar Harada（フランス、2007）、3331ギャラリー（東京、2011）など。主なグループ展に、「Media City Seoul」ソウル市立美術館（韓国、2006）、「日常の喜び」水戸芸術館（茨城、2008）、「越後妻有アートトリエンナーレ」（新潟、2009）、「Biennale Benin」（ベナン、2012）、「LIFE by MEDIA」YCAM（山口、2013）、「六本木アートナイト」（東京、2014）、「拡張するファッション」水戸芸術館（茨城、2014）、「服の記憶」アーツ前橋（群馬、2014）、「Invisible Energy」ST PAUL St Gallery（ニュージーランド、2015）など。

推薦者：臼井ちか（うすい ちか）

静岡県生まれ。有限会社チカソシキ代表取締役。日本大学芸術学部演劇学科卒業。株式会社海藤オフィスに入社し、デザイン、アート性を重視したイベントの企画制作を実践で見につける。1996年有限会社チカソシキ設立。主な企画制作は、東京銀座資生堂ビルオープニングレセプション（2001）、HOTEL HIBINO（2005）、アースキャラバン（2008）、屋久島ビジョン21（2013）、上賀茂神社の遷宮に関わるイベント（2015）。アートイベントが良い体験になるよう、アーティストにとってより良いことは何か、関わる人ひとりひとりにとって何が良いことを考え続けるアートプランナー。地域活性化、店舗展開、文化継承などあらゆることをアートととらえ、持ち前の企画力と体力で、ひとつひとつ組み立てている。こどもワークショップの手法にも定評がある。共著として「時間のデザイン」中西紹一・早川克美編 藝術学舎刊（2015）がある。

Nominator Text

In the work of Yoshinari Nishio is a bold undertaking that wears the guise of humor. The artworks are planned in a way that involves others and numerous people have engaged passionately with them. Why is this?

Is it because he conceives ideas based on what he wants to do, considers processes that are accessible, and regards diverse ideas as a good thing? As a result, we are able to become involved more proactively with the work.

The people who have experienced this open creative process, even after returning to their regular occupations, probably go on to build borderless, horizontal relations with others, and still continue to develop things in their lives. Nishio's artworks place the art ahead of the viewer on a belt of light comprised of infinite colors, as if they are moving toward this as yet unknown future.

Artist: Yoshinari Nishio

Yoshinari Nishio was born in 1982 in Nara, Japan, where he continues to live and work today. After obtaining a Ph.D. in fine arts from Tokyo University of the Arts in 2011, he stayed in Nairobi, Kenya, for two years as grantee of the Agency for Cultural Affairs. He is currently a junior associate professor at Nara Prefectural University. His work deals with the relationship between fashion and communication, developing art projects with the cooperation of people and students around the world. Nishio set up his own fashion label FORM ON WORDS, based on unique long-term study on clothing through the lens of a contemporary artist. He has also been active in planning and organizing art projects that link Africa and Japan. His solo exhibitions include 3331 Gallery (Tokyo, 2011), Gallery Cesar Harada (Paris, 2007) and KCI Gallery (Kyoto, 2009). His group exhibitions include "Invisible Energy" (ST PAUL St Gallery, New Zealand, 2015), "Wardrobe Memories" (Arts Maebashi, 2014), "You reach out - right now - for something: Questioning the Concept of Fashion" (Art Tower Mito Contemporary Art Center, 2014), Roppongi Art Night 2014, "LIFE by MEDIA" (YCAM, 2013), Biennale Benin (Cotonou, Benin, 2012), Echigo-Tsumari Art Triennale (Niigata, 2009), "Happiness in Everyday Life" (Art Tower Mito Contemporary Art Center, 2008), and Mediacity Seoul 2006 (Seoul Museum of Art).

Nominator: Chika Usui

Born in Shizuoka Prefecture, Chika Usui is the representative director of Chikasoshiki. She graduated from the theater course at Nihon University College of Art and joined Kaito Office, where she worked in event planning and production, with a focus on design and art. She founded Chikasoshiki in 1996. Major projects include the opening reception for the Tokyo Ginza Shiseido Building in 2001, Hotel Hibino in 2005, Earth Caravan in 2008, Yakushima Vision 21 in 2013, and events related to the relocation of Kamigamo Shrine in 2015. She is an art planner always striving to make art events better experiences for both artists and those involved. She considers regional development, retail expansion, and cultural heritage all within the framework of art, and engages with each project on an individual basis through her characteristic planning and physical ability. Her children's workshops are also well established. She is the co-author of "Designing Time" (2015).



Spectrum File — 13 MY NEW LIFE

推薦者：エヴァ・ミクラス・高嶺（チェコセンター東京代表）

会期：2015年11月14（土）～11月30日（月）

推薦者の言葉

子どもの病死の原因の一位 — それは小児がん。日本では毎年約2500人、世界では約25万人以上の子どもが新たにがんと診断されている。医学の進歩によって、治療後の5年生存率は今や世界平均で70%を超えと言われるが、低所得国では10%程度、高所得国では90%程度と大陸間や国家間で著しい隔たりがあり、たとえ国境が接している国であっても治癒率に大きな差があるのが現状である。

小児がんという病気にもっと関心をもってもらいたい、誤解のないように患者の様子を伝えたい — そんな思いから中欧ヨーロッパに位置する国、チェコでこの企画は誕生した。チェコはヨーロッパの中でも小児がんの治癒率が低いとされる中欧にありながら、80%～85%の治癒率を誇っている。

写真展および一連の活動が「MY NEW LIFE」と題されたのには、「がんと診断されることは終わりではなく、新しい生き方への第一歩である」というメッセージが込められている。チェコは日本から遠く離れた国ではあるが、がんと闘う子供たちの姿から伝わるメッセージは国境を越えた普遍的なものである。

プロジェクト：MY NEW LIFE

●ルツィエ・ツィングロショヴァー MUDr. Lucie Cingrošová

企画発案者、腫瘍学博士、ブラハ カレル大学第二医学部および医学部附属モトル小児血液・がんセンター / Author of the concept, the secondary physician at the Department of Paediatric Haematology and Oncology of the Motol University Hospital in Prague.

●カミラ・ベルンドルフヴァー Kamila Berndorffová

写真家、共同主催者 / photographer, co-author of the project

小児がんにもっと関心をもってもらいたい、誤解のないように患者の様子を伝えたい — そんな思いから中欧のチェコで「MY NEW LIFE」は誕生した。この作品では小児患者の姿を生きた意欲をもったごく普通の子供として表現しており、失望や絶望ばかりを描くありふれた表現を覆している。題名には「がんと診断されることは終わりではなく、新しい生き方への第一歩である」という意味が込められている。

Nominator Text

The most frequent children's death caused by disease is a tumor. About 2,500 children in Japan, more than 2,5 million children in the whole world are newly diagnosed of an oncological disease each year. Although, it is said that nowadays more than 70% of the patients, in world average can be successfully cured, there is a big gap between countries; only about 10% in countries with low income and about 90% in countries with high income. It is the fact that there is a big difference even in countries bordered on.

This “MY NEW LIFE” project was born in the Czech Republic with the desire to make public more interested in children's oncological disease and to let them know what happens in the hospital without any misunderstanding. The Czech Republic is successful with the high cure rate, 80-85%, though it is located in central Europe, where the cure rate is generally low.

The motto, “Diagnosis of an oncological disease is not an end – it is the beginning of a new life,” gave rise to the title of the photographic exhibition and the entire campaign, and at the same time, promotes the most encouraging message around the world to all children fighting against the malignant tumors.

Project: MY NEW LIFE

This “MY NEW LIFE” project was born in the Czech Republic with the desire to make public more interested in children's oncological disease and to let them know what happens in the hospital without any misunderstanding. This campaign presents the patients as regular kids with a passion for life, and thus disproves common conceptions of their despair and hopelessness. The motto, “Diagnosis of an oncological disease is not an end – it is the beginning of a new life,” gave rise to the title of the photographic exhibition and the entire campaign, and at the same time, promotes the most encouraging message around the world to all children fighting against the malignant tumors.

推薦者：エヴァ・ミクラス・高嶺（エヴァ ミクラス たかみね）

北ボヘミアに生まれる。チェコフィルハーモニー少年少女合唱団のメンバーとしてヨーロッパ、日本などでコンサートツアーに参加。1980年来日。その後フランスでの留学の後再来日し、通訳・翻訳などを経て、「ヨーガンレール」の広報担当。勤務の傍ら、音楽活動を再開。定期的にライブ活動を行うほか、横浜総合国際競技場「キリンカップ」にてチェコ国歌を2度斉唱する（1998 / 2011年）。2013年3月、チェコセンター東京代表となり、以降、音楽活動を含むチェコ文化の普及に務める。

Nominator: Eva Miklas-Takamine

Eva Miklas-Takamine was born in Northern Bohemia. As a child, was a member of the Czech Philharmonic Children's Choir, performing in concerts in the former Czechoslovakia as well as Europe and Japan. Arrived in Japan in 1980. Later, studied French literature at L'université – Paris Sorbonne. On return to Japan, worked as a freelance interpreter and teacher. Had a long career as head of Public Relations at Jurgen Lehl, a Tokyo based fashion design brand. During this time, continued to pursue musical interests, began composing and also held live concerts in various venues in Tokyo. Sang the Czech Republic national anthem at the Kirin Cup Tournament (an annual international association football tournament hosted by Japan) at Nissan Stadium in Yokohama in 1998 and in 2011. Since 2013 works as Head of Czech centre Tokyo, organization promoting Czech culture to public by various events.



Spectrum File — 14 藤井健司 Kenji Fujii

推薦者：細川麻沙美（コーディネーター）

会期：2016年1月22（金）～2月1日（月）

推薦者の言葉

今回、この場所で作品を展開するにあたり、藤井は、生年以外の情報は出さないと決めている。絶えず沢山のオーディエンスが行き交うスパイラルのエントランスには作品のみを展示し、作品に加え、自身の情報は出さないというのだ。困惑はするものの、藤井を推薦した理由は揺るがない。それは、スパイラル30周年における「スペクトラム」に明快に繋がっている。変化する色彩や領域というこの言葉の意味から派生して、現代における創造的な活動の可能性をアーティストという存在に見いだそうとする際、多岐に渡る領域や情報や事象を独自の観点と独特な方法で引き合わせ表出を試みている藤井が相応しいように感じられたからだ。だが時に、その表現は個々が想定しうる既存の認識や感覚をはるか超え、孤高になる。そして、まるで共有されることを拒否するような姿勢にみえることもあるのかもしれない。今回の態度もそのようでありながら、この場には本人が登場し、新作が公開制作される。一人のアーティストが積み上げる壮大な歴史観がこの作品の背景にはある。歴史家でもなく、冒険家でもなく、アーティスト独自の観点とその試みは果たしてそれがどんなものなのか。ここでの痕跡が、これからの新しいスペクトラムに繋がるに違いない。

アーティスト：藤井健司（ふじい けんじ）

1981年生まれ。

推薦者：細川麻沙美（ほそかわ あさみ）

1977年東京生まれ。家の前にオープンした東京都現代美術館がきっかけで、現代美術に興味を持ち、芸術学と美術教育を学ぶ。卒業後、様々な展覧会・芸術祭に関わり、2013年に独立。昨年の「スペクトラム—いまを見つめ未来を探す」展では、コミュニケーションディレクターを務めた。

Nominator Text

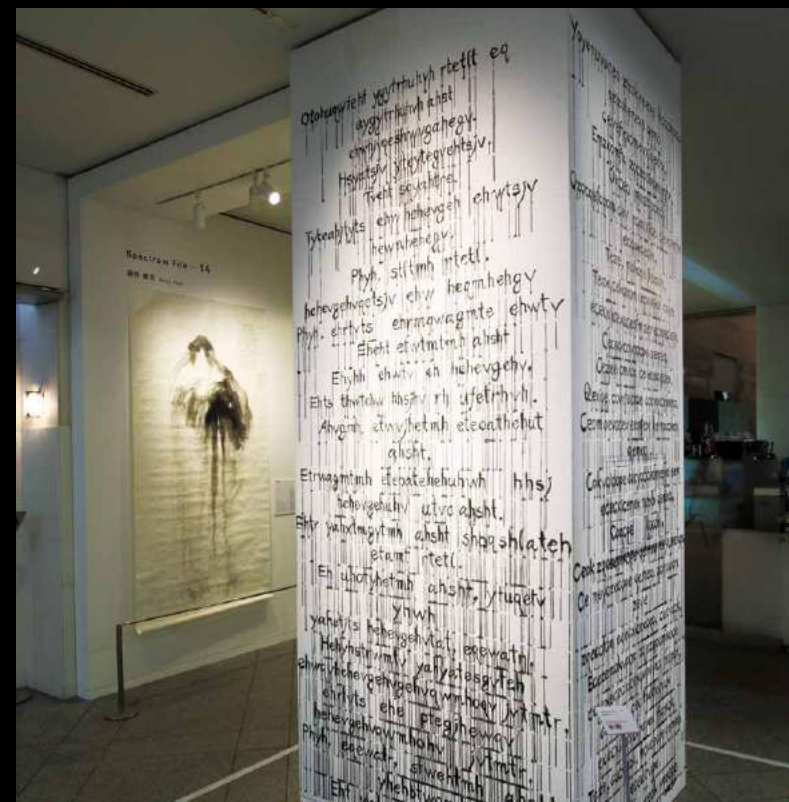
For this exhibition of his work, Kenji Fujii decided not to present any advance information other than his year of birth. He would simply exhibit his art in the always-bustling entrance hall at Spiral and supplement it with no information about himself. While this did puzzle me, my reason for nominating Fujii did not waver. This connects clearly with the theme of Spiral's 30th anniversary, "Spectrum." Derived from the word that means a band or zone of changing color, when I set out to discover the possibilities for creativity today in an artist I could sense that Fujii was an appropriate choice, due to his attempts to collate and express a wide range of areas, information and phenomena through unique techniques and from an original perspective. And yet, at times that expression far transcends the existing awareness and feelings that individuals can presume, becoming something aloof. There is perhaps something about his work that almost seems to reject being shared. His attitude toward this exhibition was also somewhat like that, though nonetheless the artist will come to the space and create his new work in public from 19 to 21 January. Lingering in the background of this work is a grandiose view of history accumulated by the single artist. What kind of work will result from this endeavor and the unique perspective not of a historian or an adventurer, but of an artist? The traces left behind will undoubtedly connect to a whole new spectrum in the future.

Artist: Kenji Fujii

Born in 1981

Nominator: Asami Hosokawa (Coordinator)

Born in 1977 in Tokyo. Developing an interest in contemporary art when the Museum of Contemporary Art, Tokyo opened near her home, she went on to study art and art education. After graduating, she was involved with numerous exhibitions and art festivals before turning freelance in 2013. She was the communications director for last year's "Spectrum: Examining Today, Searching for the Future" exhibition at Spiral.



Spectrum File — 15 森永泰弘 Yasuhiro Morinaga

推薦者：吉野 律 (アジア・カルチュラル・カウンシル (ACC) 日本オフィス ディレクター)

会期：2016年2月3(水)～2月17日(水)

推薦者の言葉

アーティストはいつの時代も自由に様々な領域を横断し、私たちに新鮮な驚きや喜びを与えてくれます。

森永泰弘は録音(レコーディング)をよりどころとして、デザインとアート、視覚体験と聴覚体験、民俗・人類学な現地調査と先端テクノロジーといったいくつもの領域を自由に横断しながら活動しているアーティストです。

自身の作品はもちろんのこと、振付家や美術家とのコラボレーションや国内外の映画作品におけるサウンドデザイン、そしてアジア各国における伝承音楽や儀礼のフィールド・ワークなど、その活動は縦横無尽です。

今回展示されている中国雲南での調査を経て制作された映像作品「Forgotten Kingdom – Dongba Shaman in Lijing」は、森永が現地に約5ヶ月間滞在し、地元の方々の信頼を得てはじめて撮影し得た貴重な映像です。

お互いの文化を尊重し、芸術や文化におけるつながりを育むことは、グローバルに生きる私たちにとって、大変重要なことです。「スペクトラム」という言葉も、領域間の静的な境界を示すだけでなく、個人と個人、国と地域、様々な個別の領域の間をつないでいく活動と読み取ることで、そこに潜む多くの可能性が見えてくるかもしれません。

アーティスト：森永泰弘(もりなが やすひろ)

サウンドデザイナー。東京芸術大学院博士後期課程単位取得満期退学後、渡仏し映画理論家・作曲家のミシェル・シオンに師事。帰国後、アジアの音楽文化を中心にフィールド・レコーディングを行いながらジャンル横断的な作品創作を展開している。参加したプロジェクトは、カンヌ国際映画祭・ヴェネチアビエンナーレ・ミラノサローネ国際家具見本市等の国際フェスティバルや展覧会、映画祭で発表されている。自身がディレクションを務めるALCAHEST Performing Artsを結成し日本と東南アジアのアーティスト達と協働して舞台作品「MARGINAL GONGS」を今秋に発表予定。

Nominator Text

Artists have always cut freely across different areas and disciplines to give us fresh surprises and joy.

Yasuhiro Morinaga is an artist working freely across several different fields—design and art, visual experiences and auditory experiences, ethnology and anthropology, field surveys and cutting-edge technology—with recording as his linchpin.

His work roams far and wide as a matter of course, from collaborations with choreographers and visual artists to sound design for international films and field world on folk music and rites around Asia.

His exhibit is “Forgotten Kingdom – Dongba Shaman in Lijing,” a video work created after fieldwork in the Yunnan province of China. Morinaga spent around five months in the region, gaining the trust of the locals to film this precious footage for the first time.

Respecting each other's culture and fostering connections in culture and the arts is extremely important as we continue to live in this global age. By interpreting the word “spectrum” not only as something that shows static boundaries between domains but also as activity that connects individuals, countries and regions, and various separate territories, we can perhaps see its numerous latent possibilities.

Artist: Yasuhiro Morinaga

He completed a doctoral program at Tokyo University of the Arts without taking a degree. He then moved to France, where he studied under the film theorist and composer Michel Chion. After returning to Japan, he started developing interdisciplinary art while conducting field recordings with a focus on music culture in Asia. As a sound designer, he has participated in projects presented at such international festivals as the Cannes Film Festival, Venice Biennale, and Milan's Salone del Mobile. In 2016, he formed ALCAHEST Performing Arts and this November will direct Marginal Gongs, a stage performance created in partnership with Japanese and Southeast Asian artists.

推薦者：吉野 律(よしの りつ)

1999年 - 2005年 金沢21世紀美術館に学芸アシスタントとして勤務。展覧会開催におけるアドミニストレーション業務を通じ、社会貢献としての文化活動、および作家活動支援の重要性を認識。2005年 - 2009年 公益財団法人三宅一生デザイン文化財団にて「21_21 DESIGN SIGHT」展覧会コーディネーター。2009年9月よりアジア・カルチュラル・カウンシル(ACC)に勤務。現在、日本オフィスディレクター。

Nominator: Ritsu Yoshino [Director, Asian Cultural Council Japan]

From 1999 to 2005, she was a curatorial assistant at the 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa, where through working in exhibition administration she became aware of the importance of cultural activities as a social contribution and the need to support artists. From 2005 to 2009, she was an exhibition coordinator at 21_21 DESIGN SIGHT for the Miyake Issey Foundation. From September 2009, she started working at the Asian Cultural Council, where she is currently director of the Japan office.



Spectrum File — 16 竹島智子 Satoko Takeshima

推薦者：松田朋春（スパイラル シニアプランナー）

会期：2016年2月18（木）～3月2日（水）

推薦者の言葉

竹島智子さんの作品に出会ったのは、所属するデザイン事務所luftでのことだ。壁にいくつかの金具が取り付けられている。「何?」「部品。」「何の?」「いや、ただの部品。」確かに部品を美しいと感じることはある。それは、必要な機能を100%発揮するための、無駄なく頼もしい機能美だろう。だが、ここには機能がない。デザインの素振りみたいなもの、とも聞いた。その言葉にいたく感激した。実際、その言葉以上にこの作品に添えるべき言葉はないのだ。そこで私は詩を一編、書くことにした。

アーティスト：竹島智子（たけしま さとこ）

1966年広島県生まれ。武蔵野美術大学工芸工業デザイン科卒。12年間にわたる「株」IDÉEでのデザイナーとしての勤務を経て、2001年にフリーランスのデザイナーとして独立。竹島智子、真喜志奈美の共同事務所として2005年にLuft設立。2012年に楠田千夏子入所。それぞれの活動をする場所としてLuftは存在している。

推薦者：松田朋春（まつだ ともはる）

アートプロデュースを通じて、まちづくりや観光プロモーション、商品開発、広告企画などに携わる。「道後オンセナート2014」プロデュース他。著書「ワークショップー偶然をデザインする技術」（共著・宣伝会議）「わたしの犬退治」（新風舎）他。典型プロジェクト代表。oblaat（オブラート）世話人。グッドアイデア株式会社代表。グッドデザイン賞審査委員。「TOKYO ART FLOW」アートプロデューサー。

Nominator Text

My first encounter with the work of Satoko Takeshima was at Luft, the design studio to which she belongs. It was some metal fittings for a wall. "What is it?" "Parts." "What kind?" "Just parts." You can certainly sense the beauty in parts, and surely to bring out the necessary function to the max requires a thoroughly efficient, reliable functional aesthetic. But here there was no function. I heard it was like a kind of "practice swing" design, a phrase that greatly moved me. There is no need for any other words to describe this work, so I have written this poem.

ネオテニー
（詩：松田朋春）

部分と全体
その
スペクトラム

全体のない
部分
は全体

声のない舌
目のない光
言葉のない意味

部分が
完成する
星のように

おとなのない子ども
雑踏の時間が
素通りしていく
まちぼうけの子ども

Neoteny
(Poet: Tomoharu Matsuda)

Part and whole
That
Spectrum

A part
with no whole
is the whole.

Voiceless tongue
Light with no eye
Wordless meaning

The part
Completes
Like a star

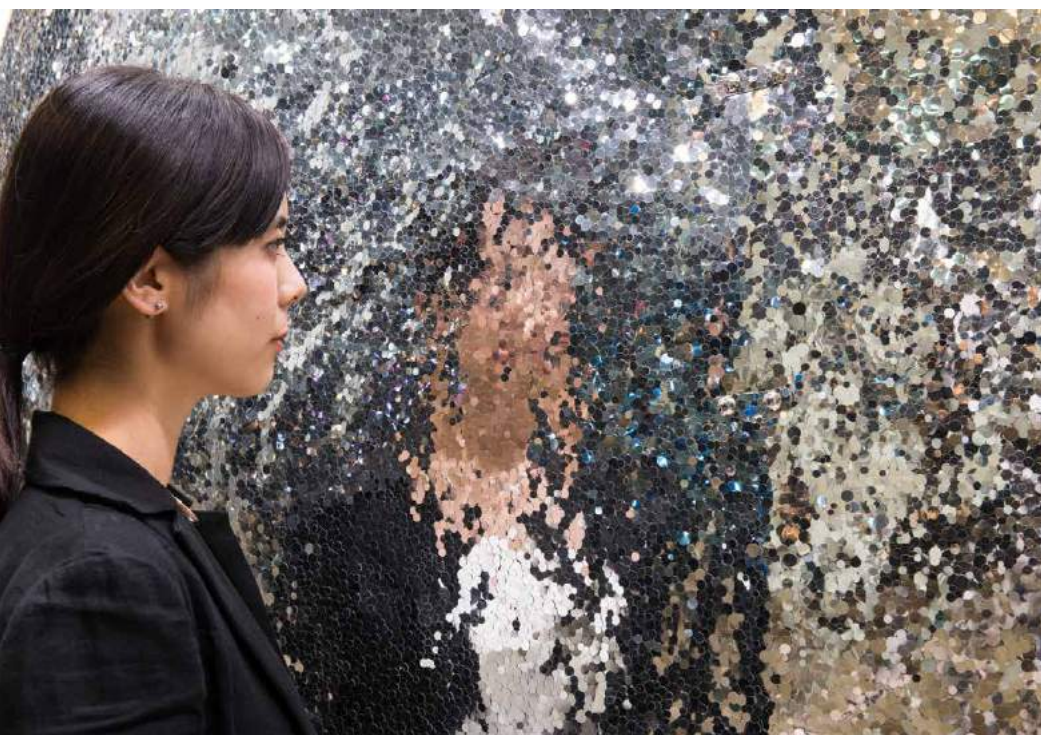
Children with no adults
Crowded time
Passes through
Children waiting in vain

Artist: Satoko Takeshima

Born in Hiroshima Prefecture in 1966, Satoko Takeshima graduated from Musashino Art University's Department of Industrial, Interior and Craft Design. After 12 years as a designer at IDÉE, she became an independent designer in 2001. She established Luft in 2005 as a joint studio with Nami Makishi. In 2012, they were joined by Chikako Okeda. Luft exists as a space for the three to do their respective work.

Nominator: Tomoharu Matsuda (Senior Planner, Spiral/Wacoal Art Center)
Tomoharu Matsuda works as an art producer involved with regional development, tourism, product development, and advertising. In 2014, he produced Dōgo Onsenart in Ehime Prefecture. His writings include "Techniques in Designing Workshop Chance" and "Exterminating My Dog." He is the head of tenkei project and a manager for the design label oblaat, as well as President of Good Idea Inc., and a Jury member for the Good Design Awards. TOKYO ART FLOW art producer.







イベントレポート Event Report





ミナ ペルホネン20周年 × スパイラル30周年記念 ミナ ペルホネン展覧会『ミナカケル』



2002年に開催した「粒子」、2010年の「進行中」を経て、3回目となる大規模なミナ ペルホネンの展覧会を開催しました。

会期中はスパイラルに3つの展覧会限定ショップが登場。アーカイブのテキスタイルを用いたバッグやブローチなどの小物のほか、展覧会の為の特別なドレス、家具やホームプロダクトなど、展示作品と連動した様々なアイテムを販売、ミナ ペルホネンのこれまでの活動と共に、ファッションの領域を越え様々なフィールドでの挑戦をし続けるブランドが標榜する未来をご覧いただきました。

建築家の田根剛が手掛けた会場構成も注目を集めました。

minä perhonen 20th Anniversary & Spiral 30th Anniversary minä perhonen Exhibition “Minakakeru”

Following previous exhibitions in 2002 and 2010, this was minä perhonen's third large-scale exhibition. During the event, three exclusive boutiques appeared in Spiral. The exhibition featured a range of items for sale in conjunction with the exhibits, including special dresses designed especially for the event, furniture, and other household products as well as bags and brooches made from old textiles. The event offered visitors the opportunity to experience the fashion brand's activities until now and also glimpses of its future vision as it continues to challenge and transcend the conventions of apparel. The venue layout, designed by architect Tsuyoshi Tane, attracted much attention.

Dates: May 20th – June 7th, 2015

Venue: Spiral Garden

開催概要

会期：2015年5月20日（水）～6月7日（日）

会場：スパイラルガーデン

主催：株式会社ミナ

会場協力：株式会社ワコールアートセンター

会場構成：DGT.[Dorell.Ghotmeh.Tane/Architects]



〈SICF16〉受賞者

グランプリ	神楽岡久美
準グランプリ	上路 市剛
準グランプリ	宮ヶ丁 渡
アーホ!賞	amano yumi
佐藤尊彦賞	村田実莉
紫牟田伸子賞	小池奈緒
三木あき子賞	瀬川辰馬
皆川明賞	FUKILAU
スパイラル奨励賞	後藤 宙
オーディエンス賞	関川こうじ

SICF16 第16回 スパイラル・インディペンデント・クリエイターズ・フェスティバル

「SICF」(スパイラル・インディペンデント・クリエイターズ・フェスティバル)は、次代を担うクリエイターの発掘・育成・支援を目的とし、スパイラルが2000年から開催しているアートフェスティバルです。

SICFで受賞したアーティストがその後TVや雑誌に取り上げられるなど、若手アーティストが世に出るチャンスとして注目されています。

2015年に開催されたSICF16では、細かなミラーシートが鑑賞者を点描画のように映す作品を出展した神楽岡久美『光を摘む』がグランプリを受賞しました。

SICF16: Spiral Independent Creators Festival 16

Spiral Independent Creators Festival (SICF) is an art festival that launched in 2000 to discover, foster and support emerging artists and designers. The festival has proved a career steppingstone for young artists, and past award-winners have been featured on television and in magazines.

Period 1: May 2nd – May 3rd, 2015

Period 2: May 4th – May 5th, 2015

[Both two-day periods featured 50 exhibitors.]

Venue: Spiral Hall

開催概要

会期：A日程 2015年5月2日(土)～3日(日・祝)
B日程 2015年5月4日(月・祝)～5日(火・祝)

*両日程ともに50組2日間ずつ

会場：スパイラルホール

審査員(敬称略)

倉本美津留(放送作家)

佐藤尊彦(BEAMS プレスマネージャー)

紫牟田伸子(編集家/プロジェクトエディター)

三木あき子(元バレ・ド・トーキョー[パリ]、チーフ/シニア・キュレーター)

皆川 明(minä perhonen デザイナー)

岡田 勉(スパイラル シニアキュレーター)

主催：株式会社ワコールアートセンター

協賛：東京リスマチック株式会社

協力：CLIP / 株式会社ステージフォー/ソケット株式会社

企画制作：スパイラル

グラフィックデザイン：FORM::PROCESS

写真：市川勝弘



SICF16 グランプリアーティスト展 神楽岡久美『光を摘む』

2015年5月に開催した「SICF16」に於いて参加100組のクリエーターの中からグランプリに選ばれた、神楽岡久美による個展『光を摘む』を開催しました。

シリーズ作品『光を摘む』は、小さな鏡による光の粒の集合体に、鑑賞者が点描画のように映し出され、見る者と作品が呼応する様がとても印象的な作品です。作品自体が「アートを生み出す装置になる」という視点や、「光を捉える」という明快なコンセプトと、コンセプトに対する緻密な裏付けの提示が評価され、「SICF16」でグランプリを受賞しました。

本展では、グランプリを受賞した『光を摘む』の作品規模を拡大させ、周囲の環境を取り込みながらよりダイナミックに、空間インスタレーションを展開しました。

SICF16 Grand Prix Artist Exhibition

Kumi Kaguraoka "Gathering Light"

This solo show featured the work of Kumi Kaguraoka, who won the Grand Prix out of 100 participants at SICF16 in May. "Gathering Light" is a series of striking artworks in which the viewer is reflected on a pointillist-like mirror, creating a dialogue between the viewer and the art. Kaguraoka's work was praised for how it becomes a "device" for producing art, and addresses the concept of how we interpret light. The exhibition expanded the scale of the award-winning work into an installation that dynamically incorporated the surrounding space.

Dates: October 2nd – October 8th, 2015

Venue: Showcase

開催概要

会期：2015年10月2日(金)～10月8日(木)

会場：ショウケース

主催：株式会社ワコールアートセンター

企画制作：スパイラル

写真：表 恒匡



Nature Creations -Flowers- Botanical motifs in art, craft and design by Japanese creators.



古来より人々は、自然が自ずと創り出す造形の美しさに魅了されてきました。その造形美は、多くのクリエイションのインスピレーションの源となり、時にはモチーフとして、時には素材として、私たちの生活の中に取り込まれています。

「Nature Creations」は、植物や昆虫、土、木、金属など、自然由来の素材やモチーフを元に創り出される様々な表現を紹介するシリーズ展覧会です。

第1回目となる今回のテーマは『Flowers』。

明るく美しい有様を表す「華やか」という言葉の語源のとおり、花の佇まいや色彩は人々の心を惹きつけて止みません。

本展では、花々からのインスピレーションで生まれた陶芸、絵画、刺繍、切り絵、器、グラフィック、プロダクトなど、100点にのぼる作品を展示販売しました。

〈出展作家〉

倉俣史朗、石本藤雄、渡邊良重、多田明日香、シアタープロダクツ、フクシマチヒロ、稲垣侑子、上出長右衛門窯+丸若屋、suzukirie、尾野訓大、イシカワナナ、bonboog、murderpollen、Sarahbel、セラミック・ジャパン、はいいろオオカミ+花屋 西別府商店、DÉCORATION DE FLEURS atelier cabane、SOIE : LABO、DILIGENCE PARLOUR、井上枝利奈、田中和人、池田衆、植田志保、佐合道子、悠、小曾川瑠那、和田麻美子、笹川健一、D-BROS、KIKOF、KIMIKO SUZUKI、橋本尚美、阿部海太郎、スクラップ装飾社、株式会社日比谷花壇〈順不同〉

Nature Creations: Flowers

Botanical motifs in art, crafts and design by Japanese creators

“Nature Creations” is a series of exhibitions introducing artworks inspired by natural materials and motifs, such as plants, insects, soil, wood, and metal. The theme of the first exhibition was flowers. The vibrant colors and beautiful appearance of flowers have universal appeal and never cease to enchant us. This exhibition featured 100 florally inspired items, including ceramics, paintings, embroidery, paper cutting, graphic design, products, and more.

Dates: August 19th – September 6th, 2015

Venue: Spiral Garden

開催概要

会期：2015年8月19日（水）～9月6日（日）

会場：スパイラルガーデン

主催：株式会社ワコールアートセンター

協力：リードオブジャパン株式会社、オークヴィレッジ株式会社

企画制作：スパイラル

会場構成：デザインムジカ

写真：青木勝洋



the art fair +plus-ultra 2015 ジ・アートフェア +プリュスーウルトラ 2015

— 先端のアートフェアへ。

『ジ・アートフェア +プリュスーウルトラ』は、実績と信頼を誇るギャラリーが、ジャンルの垣根を超えて優れたアートを幅広く提供することを目指す「+プリュス」カテゴリーと、アートマーケットの次代を担う40歳以下の若手ディレクター個人を出展単位とし、常に新鮮な感性を届けることを目的とする「ウルトラ」カテゴリーの、2つの部門を持った、世界でも類を見ない統合型のアートフェアです。2015年度は会期を12月に移動し、3会期での実施。

「ウルトラ」カテゴリーのブースも会場構成を見直し、壁面を増やすことで立体作品の販売も強化しました。

「+プリュス」カテゴリー 17ギャラリー、「ウルトラ」カテゴリー 38ディレクターが出展し、一層見応えのある形で展開しました。

the art fair +plus-ultra 2015

This unique, fully comprehensive art fair comprises two sections: “+Plus,” showcasing superb work by artists from established galleries across all media and styles, and “Ultra,” which aims to present new sensibilities through single booths curated by gallery directors aged 40 or younger.

The 2015 fair took place in December, divided into three periods. The event was also given a fresh look, thanks to new graphic design by a Swiss designer. The venue layout for the Ultra booths was revised and more wall surfaces added, increasing sales of sculptural artworks. With 17 galleries in the +Plus section and 38 gallery directors participating in Ultra, this year saw the quality of the fair even further enhanced.

Period 1: December 18th – December 20th, 2015

Period 2: December 22nd – December 24th, 2015

Period 3: December 26th – December 28th, 2015

Venue: Spiral Garden

開催概要

会期： term1： 2015年12月18日（金）～ 20日（日）

term2： 2015年12月22日（火）～ 24日（木）

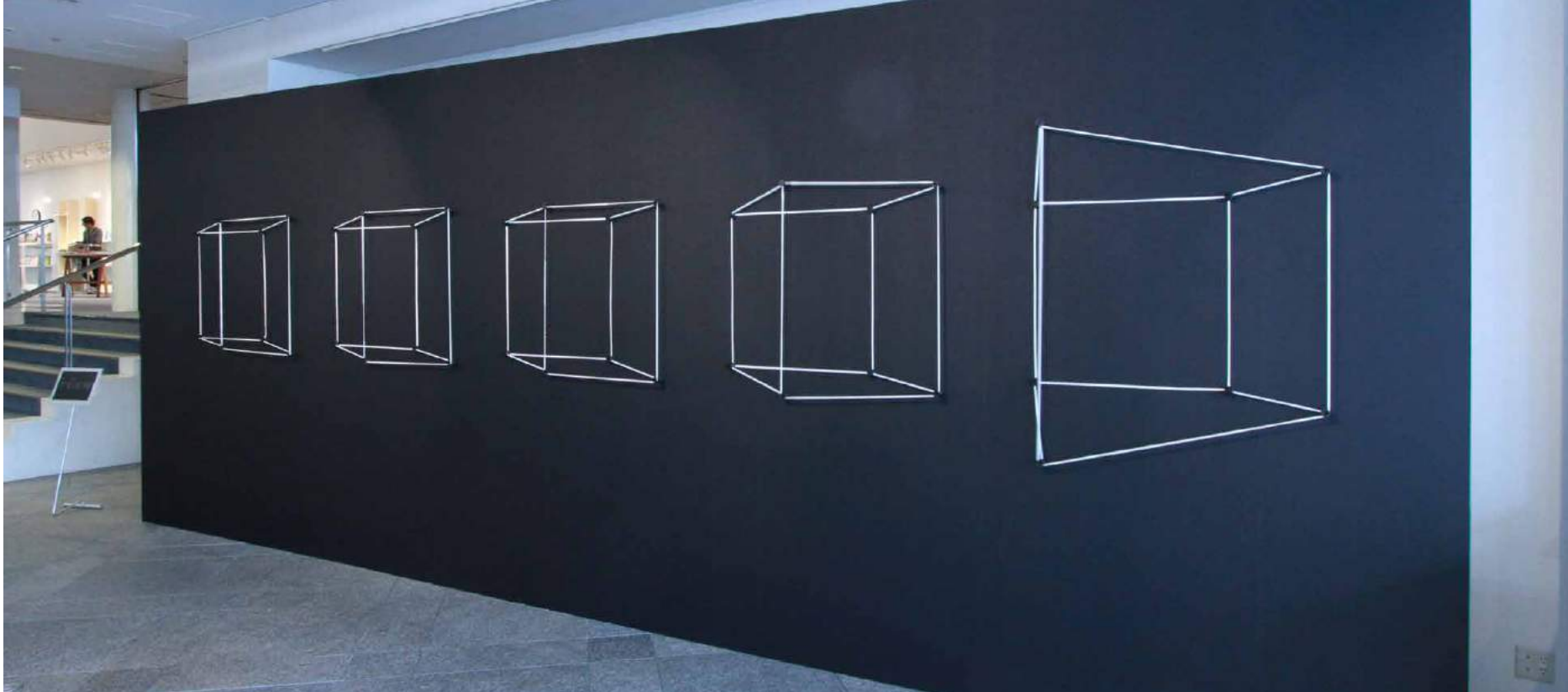
term3： 2015年12月26日（土）～ 28日（月）

会場： スパイラルガーデン

主催： システム：ウルトラ（株式会社ワコールアートセンター／株式会社レントゲンヴェルケ）

企画制作： スパイラル

写真： 市川勝弘



Dimensions

スパイラルの冬期エントランス装飾として、Rhizomatiks Researchによる作品「Dimensions」を展示しました。

制御されたモーターで動くワイヤーがまるでCGのように変形し、様々な図形を作り出します。

多くの来場者が足を止め撮影する姿が見られました。

Rhizomatiks Research

artist&enginner	坂本洋一 (Rhizomatiks Research)
enginner	田井秀昭 (Rhizomatiks Research)
sound	黒瀧節也 (Rhizomatiks Research)
director	石橋 素 (Rhizomatiks Research)

Dimensions

"Dimensions" by Rhizomatiks Research was installed in the Spiral Entrance for the winter season. It featured wires controlled by motors that moved almost like computer graphics, transforming into a range of shapes. Many passersby were captivated by the exciting installation and stopped to take photographs.

Dates: December 4th, 2015 – January 17th, 2016

Venue: Spiral Entrance

開催概要

会期：2015年12月4日(金)～2016年1月17日(日)

会場：スパイラルエントランス

主催：株式会社ワコールアートセンター

企画制作：スパイラル



SPIRAL BOOK GARDEN -Picture Book & Poem-



現代アーティストが描く、いまに寄り添う“絵本”と“詩”

「SPIRAL BOOK GARDEN」は現代のアーティストやデザイナー、詩人、絵本作家の書籍をスパイラル独自のセレクトでご提案する期間限定のブックギャラリーです。

第1回目となる今回のテーマは「絵本と詩」。

現代アーティストが“いま”を生きる子供たちに向けて描いた最新の絵本を始め、シニカルな視点で捉えた大人向けの絵本や詩作品を紹介。

谷川俊太郎や田島征三を始め、渡邊千夏、みうらじゅん、森村泰昌、今日マチ子、松本大洋、トラフ建築設計事務所の鈴野浩一、禿真哉など現代を代表するアーティストたちが描く話題の絵本や詩集100冊を取り揃え展示、販売しました。

Spiral Book Garden

Picture Books & Poetry

Picture books and poetry for today, created by contemporary artists

Spiral Book Garden is a temporary book gallery showcasing the work of artists, designers, poets, and picture book authors. For this first event in the series, the theme was “picture books and poetry.” It featured exhibits for sale of around 100 picture books and poetry collections, including those written from more cynical perspectives for grown-ups as well as the latest children's picture books.

Dates: December 8th – December 14th, 2015

Venue: Spiral Garden

開催概要

会期：2015年12月8日(火)～14日(月)

会場：スパイラルガーデン

主催：株式会社フコールアートセンター

企画制作：スパイラル

協力：ソニー株式会社



〈講座一例〉

〈LIFESTYLE & CULTURE〉

食文化やライフスタイルなど暮らしの豊かさを学ぶ講座

- ・紅茶と英国文化：紅茶と英国文化のつながりや、ティータイムをより楽しむ方法について学びます。
- ・Screen English：映画を見ながら、その中に出てくる生きた英語を学びます。

〈ART & DESIGN〉

アートや文化について知り教養を深める講座

- ・美しい暮らしの学校：北欧デザイン研究の第一人者、島崎信氏をお迎えし、椅子や照明、テーブルウェアなど身近な日用品がどのようにデザインされ、世の中に広まったのか、社会背景と共に学んでいきます。
- ・キュレーター × キュレーター：アートにまつわる様々なビジネスにご関心のある方におすすめの講座です。

* Schole (スコレー)とは

ギリシャ語で「余暇／学び／遊び」を指す言葉で、学校を意味する「School」や「スコラ学」等の語源とされています。余暇と言っても、単に享乐的に遊ぶのではなく、自己研鑽や精神的な充実のために活用する時間のことであり、これらの蓄積がやがてギリシャ哲学の生成につながったとされています。

〈BODY MANAGEMENT〉

自らのからだをマネジメントする講座

- ・大人の保健体育：女性のからだについて50年以上にわたり研究を重ねているワコール人間科学研究所。これまでに蓄積されたデータをベースに、より美しくあるためのケアも提案しています。自分自身のからだに向き合い、自分らしいからだについて考えていきます。

〈CAREER & SKILL UP〉

スキルアップやキャリアにつながる講座

- ・仕事を知る：世の中に存在する様々な仕事。各ジャンルで活躍する方々をゲストに迎え、仕事の内容や普段心がけていること、キャリアについてなど伺っていきます。

1985年の創業以来、ワコールの企業理念「女性のこころとからだを美しくすること」を目指し、現代女性のコミュニケーション基地として多彩なアートプログラムを発信してきたスパイラル。今、女性達はそれぞれのライフステージによって、仕事、勉強、出産、育児、介護、趣味など、多角的なライフスタイルを送っています。本プログラムでは、スパイラルとワコールがこれまでに培ったノウハウとネットワークから選び抜いた、経験豊かなプロフェッショナルを講師として迎え、様々なニーズに合わせた講座を展開します。

Spiral and Wacoal Presents

Spiral Schole

Ever since it opened in 1985, Spiral has aspired to fulfill the Wacoal corporate philosophy of “making women's hearts and bodies beautiful” by its diverse art programming and serving as a communication hub for women today. Whether in work, study, starting families and parenting, taking care of others, or hobbies and interests, women live multi-faceted lives depending on the stages of their lives. Spiral Schole was a series of varied lectures by highly experienced professionals, carefully selected from Spiral and Wacoal's rich network and knowhow.

開催概要

開講：2015年4月～

共催：株式会社ワコールアートセンター、株式会社ワコール

企画制作：スパイラル

企画協力：株式会社青い鳥創業、日本財団、UP FOR YOGA

スパイラルとワコールの共同企画 Spiral Schole

榎総合計画事務所創立50周年 × スパイラル開館30周年記念シンポジウム 「建築家とは何者か」

スパイラル開館30周年に加え、スパイラルの建築を設計した建築家・榎文彦氏が主宰する榎総合計画事務所が、2015年に創立50周年を迎えた事を記念した、榎文彦氏司会によるシンポジウムを、30周年を迎えるスパイラルホールで開催しました。

ゲストに石堂威氏（都市建築編集研究所代表）、太田佳代子氏（建築キュレーター、編集者）、塚本由晴氏（建築家、アトリエ・ワン共同主宰。東京工業大学大学院教授）、西沢立衛氏（建築家、SANAA、西沢立衛建築設計事務所代表。横浜国立大学大学院教授）をお迎えし、「建築家とは何者か」を議論しました。

Maki and Associates 50th Anniversary &
Spiral 30th Anniversary Joint Symposium
What is an Architect?

Commemorating both Spiral's 30th anniversary and the 50th anniversary since Maki and Associates was founded by Fumihiko Maki, the architect who designed Spiral, this special symposium was led by Maki himself at Spiral Hall.

Dates: November 8th, 2015
Venue: Spiral Hall



開催概要

開催日：2015年11月8日（日）
会場：スパイラルホール
共催：株式会社榎総合計画事務所、株式会社ワコールアートセンター



スパイラル30周年特別企画 山口小夜子主演舞台『忘れな草』上映会

1970年代のトップモデルとして、様々なクリエイターに影響を与えた山口小夜子。

今なお高い注目を浴びる山口小夜子が、1986年にスパイラルホールにて主演を演じた演劇『忘れな草』の映像を同ホールにて上映しました。

約30年の時を経て、公演が実際に行われた同じ空間で、山口小夜子と役者たちの息づかいが蘇りました。

Spiral 30th Anniversary Special Exhibition
Screening of Sayoko Yamaguchi in
“Forget-Me-Not”

Sayoko Yamaguchi was Japan's most famous model in the 1970s and made a significant influence on the arts and design. This was a screening of the play “Forget-Me-Not,” which was performed in 1986 at Spiral Hall and starred Sayoko Yamaguchi in the title role. Almost 30 years after the original staging, the performances of Yamaguchi and the rest of the cast were resurrected in the same venue.

Dates: October 24th – October 25th, 2015
Venue: Spiral Hall

開催概要

開催日：2015年10月24日(土)・25日(日)
会場：スパイラルホール
主催：株式会社ワコールアートセンター
企画制作：スパイラル
協力：2015「氷の花火 山口小夜子」製作委員会



スパイラル 聲明コンサートシリーズ vol.24 「千年の聲」 螺旋曼荼羅海会

スパイラル開館30周年を飾る「千年の聲」ファイナルコンサート『螺旋曼荼羅海会（らせんまんだらかいゑ）』は、この建物を象徴するスパイラルガーデンの螺旋空間のために創られた作品です。

吹き抜けの天空から渦巻状にスロープを降りると、そこは海の底を思わせる庭。海はさまざまな生命が生まれる源、その底の法螺貝の渦巻の先端のような眼には見えない一点から、生命の息吹が始まります。

そこから立ち上るエネルギーが声となって発せられ、やがて風を起し、広がる声の波動が会場を包みます。

アメリカ・インディアンのナヴァホ族の創世神話に基づく儀式歌をテキストに、挿入歌「風の歌」と「夜の歌」を新進気鋭の桑原ゆうが作曲しました。

This finale to the Shomyo Concert Series helped celebrate Spiral's 30th anniversary and was especially created for the spiral-shaped (rasen) atrium that is the centerpiece of Spiral's architecture. Descending the eddying slope from the heights of the atrium, audiences experienced a garden evocative of the bottom of the sea.

This sea was a rich source of life. New life started from an invisible point like the spire tip of a conch shell on the seabed. The energy that arose from this life force became voices, blowing a wind and enveloping the entire venue in waves of unfolding voices. With a text taken from a ceremonial song based on the creation myths of the Native American Navajo people, the music was by the up-and-coming composer Yu Kuwabara.

Dates: January 9th – January 10th, 2016
Venue: Spiral Garden

開催概要

開催日：2016年1月9日（土）、10日（日）
会場：スパイラルガーデン
主催：声明の会・千年の聲／株式会社ワコールアートセンター
出演：声明の会・千年の聲
構成・演出：田村博巳
作曲：桑原ゆう
宣伝美術：井原靖章
制作：スパイラル／NPO法人魁文舎／声明の会・千年の聲
助成：芸術文化振興基金
写真：bozzo



ロサンゼルス／東京 国際共同プロジェクト TOUCH OF THE OTHER — 他者の手 —



1960年代、公衆トイレにおける男性間の性行為について詳細かつ科学的に研究を行った社会学者ロード・ハンフリース。

ロサンゼルスに所蔵されている彼の調査研究資料をもとに、ジョナサン M. ホールと川口隆夫が立ち上げた国際共同プロジェクト「TOUCH OF THE OTHER」の、世界初演をスパイラルホールにて発表した。

世界各地において LGBT (レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダー) の社会的権利が確立していく中で、あえて、これまでの「逸脱した」文化に焦点を当て、これからの未来を社会に問う作品となった。

関連展示として、スパイラルホールホワイエにて、ハンフリースの「シネマチック・オブザベーション・シート」全50枚を一挙に展示する「WATCHQUEEN展」を同時開催した。

The sociologist Laud Humphreys conducted extensive scientific research into sexual contact between men in public toilets during the 1960s. His research materials, stored in the ONE National Gay and Lesbian Archives in Los Angeles, formed the basis for this joint international project between Takao Kawaguchi and Jonathan M. Hall, which was performed at Spiral Hall. As the debate over LGBT rights continues to evolve around the world, this timely work focused on a culture that until recently was considered “deviant” and posed questions about the future of our society.

Dates: January 15th – January 17th, 2016

Venue: Spiral Hall Foyer (Spiral 3F)

開催概要

開催日：2016年1月15日(金)、16(土)、17日(日)

会場：スパイラルホール ホワイエ

主催：株式会社ワコールアートセンター／一般社団法人ハイウッド／川口隆夫

コンセプト：ジョナサン・M・ホール

構成・演出：川口隆夫、ジョナサン・M・ホール

ドラマツルク・アートディレクション：飯名尚人

音楽：恩田晃

映像：今泉浩一

作品写真：鷹野隆大

出演：柴崎健太

ドリュウ・ウッズ

マルコ・アレホス

斎藤栗子

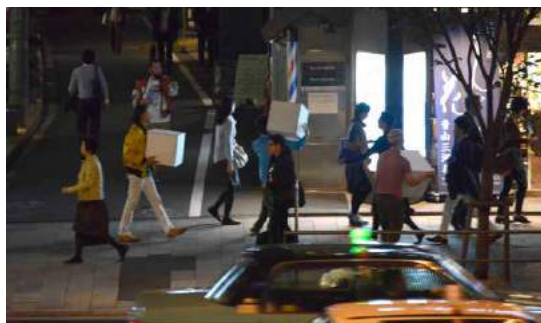
佐藤ベチカ

川口隆夫

写真：bozzo



DanceNewAir2016 プレ公演 サイトスペシフィックシリーズ vol.1
“distant voices - carry on” ～青山借景



開催概要

開催日：2015年10月10日(土)、11日(日)、12日(月・祝)

会場：スパイラルホール及びスパイラル全館

コンセプト・演出：ハイネ・アヴダル、篠崎由紀子

インスタレーション：梅田哲也

振付・出演：イングリッド・ハークスタッド、陽かよ子、
アイヴィン・セルイエセット、アンドレイ・アンドリアノフ、
山田うん、遠田 誠、白神ももこ、長内裕美、ハイネ・アヴダル、
篠崎由紀子

サウンド・デザイン：ローランド・ルイテン、ジョアン・ロワゾ

美術：アルノ・ムールマン

ドラマトゥルク：アンドレ・アイエルマン

エキストラ出演：KEKE、暁月、岡田智代、尾形直子、梶本はるか、熊谷理沙、
斉藤雅紗、新宅一平、菅江一路、長尾明実、日坂春奈、
藤倉めぐみ、三浦建太郎、森田理紗、吉澤慎吾、吉福敦子、
和中和央

慣れ親しんだはずの日常風景をさりげなく非日常へと反転させた『Borrowed Landscape - Yokohama(横浜借景)』から3年。

30周年を迎えるスパイラルの空間を舞台に、ハイネ・アヴダルと篠崎由紀子による国際共同制作『distant voices - carry on』～青山借景を開催しました。

スパイラルの屋内外、一般には公開されない空間に身体／音／オブジェを介在させ、時間の経過とともに作品の形態を変化させていくサイトスペシフィックな作品。

参加者ひとりひとりが自分の位置や見方を主観的に選択することができ、知覚が開かれ、ありふれた日常を別のイメージへと読み替えるパフォーマンスを展開しました。

Dance New Air 2016 - Specific Series Vol.1

“distant voices - carry on” ~ Aoyama Shakkei

This international coproduction by Heine Avdal and Yukiko Shinozaki helped celebrate Spiral's 30th anniversary with a site-specific performance taking in the entire space and as well as outdoors in the Aoyama area. Bodies, sounds and objects were interposed between spaces usually closed to the public, transforming in form over the course of the performance. Each member of the audience could choose their own subjective position or way to experience the performance, opening their perceptions to replace the everyday world with alternate images.

Dates: October 10th - October 12th, 2015

Venue: Spiral Hall and all over Spira

プロダクション：fieldworks vzw、Heine Avdal

プロデューサー：宮久保真紀(Dance New Air)、岡崎松恵(Offsite Dance Project)

テクニカル・ディレクター：遠藤 豊

照明：DOTWORKS

音響：中原 菜

広報デザイン：太田博久

映像ドキュメンテーション：藤井 光

記録映像：amano studio

主催：Dance New Air(一般社団法人Dance Nippon Associates)、

株式会社ワコールアートセンター、NPO法人Offsite Dance Project

共同制作：スパイラル、Borrowed Landscape Japan、STUK (Leuven, Belgium)、

PACT Zollverein (Essen, Germany)、APAP、fieldworks、Heine Avdal

助成：公益財団法人セゾン文化財団、アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)、

Norwegian Ministry of Foreign Affairs、Norsk Kulturråd、Vlaamse

Gemeenschap、Vlaamse Gemeenschapscommissie、フェスティバル／トーキョー
15連携プログラム

写真：森 日出夫

Masaki Hayashi

Pendulum



おだやかな、晴朗な、夢の^{イメージ}形象——。

渡辺貞夫、菊地成孔、小野リサ、椎名林檎など、多岐にわたるジャンルの重要人物から寵愛を受けるピアニスト・作曲家である林正樹のあらたなフェーズのはじまりを告げる会心のフルアルバム。「コンポーズ」を主眼として取り組み、クラシック、ジャズ、ワールド、アンビエントなど、広汎な音楽のエレメントを、独特の諧謔を含ませたハーモニーと高度な実験性により織りあげた静的で無国籍な音楽世界は、ノスタルジックでかつ晴朗な、夢の^{イメージ}形象を立ちのぼらせる。

発売日：2015年9月2日（水）

価格：2,870円（税別）

参加アーティスト：Antonio Loureiro(Vibraphone, Voice), Joana Queiroz(clarinet), 藤本一馬[Guitar], 徳澤青弦[Cello], Fumitake Tamura(Electronics)

レーベル：SPIRAL RECORDS

Masaki Hayashi, Pendulum

Pianist and composer Masaki Hayashi's wide-ranging career has seen him work with the likes of Sadao Watanabe, Naruyoshi Kikuchi, Lisa Ono, and Ringo Sheena. This full album release ushers in a new phase in his output, mixing diverse elements from classical music, jazz, world music, and ambient music. Hayashi conjures up a lyrical, stateless musical world, interwoven out of harmonies filled with original humor and highly advanced experimentation. The result is nostalgic and serene dream imagery.

Released: September 2nd, 2015

Price: ¥2,870 (excluding tax)

林 正樹 《Pendulum》

KAZUMA FUJIMOTO

FLOW



大地の薫るチェンバーミュージック。

これまで Carlos Aguirre や André Mehmari、中島ノブユキ、林正樹、伊藤志宏など様々なアーティストと共演、世界中に拡がりを見せる現代的なチェンバーミュージックの潮流の日本における担い手として注目されるギタリスト・作曲家、藤本一馬が、室内楽のあらたなかたちを標榜したアルバム《FLOW》。ジャズ、クラシックを基調とし、ブラジルやアルゼンチンをはじめとする南米のフォークロリックな音楽から大地の滋養を汲み、静謐な響きのうつろい、ゆるやかなうねりを宿した演奏で、自然の情景と通いあう。

発売日：2016年3月30日（水）

価格：2,870円（税別）

参加アーティスト：Silvia Iriondo (Vocal), Joana Queiroz (Clarinet), 林正樹 (Piano), 西嶋徹 (Bass)

レーベル：SPIRAL RECORDS

Kazuma Fujimoto, Flow

Regarded as a leader in the contemporary chamber music scene in Japan, guitarist and composer Kazuma Fujimoto has performed with such musicians as Carlos Aguirre, André Mehmari, Nobuyuki Nakashima, Masaki Hayashi, and Shiko Ito. This album adopted an innovative approach to chamber music, taking a jazz and classical music base and adding elements of South American folk from Brazil and Argentina. The music communes with the natural landscape, harboring serene resonance and gentle waves.

Released: March 30th, 2016

Price: ¥2,870 (excluding tax)

藤本一馬 《FLOW》



MINA-TO (ミナト) オープン

スパイラルのエントランスに新たなコミュニケーションスペース「MINA-TO」がオープンしました。

「MINA-TO」とは—

- 1 「港」in global-scale：新鮮な情報に触れ、国境を越えた出会いを楽しむ
- 2 「港」freshness：鮮度の高いもの、旬な出来事、新しい出会い
- 3 「皆と」co-organized with: 皆とつながり、共に生み出す、柔軟なしくみ

世界中から新しいものが届き、人々がつながる「港」。ここは、現代アート作品の展示販売、旬のクリエイターたちが創り出すプロダクトの紹介、東京近郊の展覧会情報の提供、その日に見られる公演チケット(当日券)の販売、多彩な講師によるレクチャーやワークショップの開催など様々な機能を持ち、ヒト・モノ・コトが自由に行き交う都市における文化の「MINA-TO」です。設計は、今注目を集める若手建築家・萬代基介氏が手掛けました。

MINA-TO

Ever since it opened in 1985, Spiral has continued to present a wide range of culture and art. Launched in Spiral Entrance in March 2016, MINA-TO is a new kind of communication space for people to interact and intersect with contemporary Japanese culture.

The name is a play on words, meaning both “port” and “with everyone” in Japanese.

It aspires to be:

- (1) A global port, offering encounters with new information that transcend national boundaries
- (2) A harbor of fresh items, ideas and meetings
- (3) Co-organized with everyone, providing flexible structures, connections and opportunities to create together

Ports are places where new things arrive from all over the world; where people connect with each other.

MINA-TO exhibits and sells contemporary artworks, introduces products by new designers, supplies information on exhibitions in the Tokyo area, sells tickets for performances on the same day, and presents workshops and lectures by varied guests.

It is a cultural hub for people, things and ideas to intersect freely in the city. The space was designed by the up-and-coming architect Motosuke Mandai.

店舗概要

オープン日：2016年3月19日(土)

店舗名：MINA-TO (ミナト)

場所：スパイラルエントランス

営業時間：11:00 ~ 20:00

定休日：無休

お問い合わせ：03-3498-4015

写真：瀧本幹也



「+S」Spiral Market 銀座 オープン

銀座・数寄屋橋交差点に誕生した「東急プラザ銀座」内に、スパイラルマーケットの新たな店舗となる「+S」Spiral Market 銀座がオープンしました。

「Texture（手触り・本質）」をコンセプトに、質感や手触りからモノの本質が感じられるアイテムを集めるほか、幅広いアイテムの中から、

素材感にこだわったプロダクトに焦点をあて、展覧会形式でクリエイターの考えやプロダクトを紹介するコーナー《「+S」texture box》も展開します。

「+S」Spiral Market GINZA

Spiral Market opened a branch inside Tokyu Plaza Ginza, the new department store at the Ginza-Sukiyabashi intersection.

「+S」Spiral Market Ginza features a wide range of items selected for their fine texture and quality, and also a special section called “+S texture box” that showcases designers' ideas and products in an exhibition format.

Opened: March 31st, 2016

Address: Tokyu Plaza Ginza B1, 5-2-1 Ginza, Chuo-ku, Tokyo, 104-006

店舗概要

オープン日：2016年3月31日（木）

店舗名：「+S」Spiral Market 銀座

場所：〒104-0061 東京都中央区銀座5-2-1 東急プラザ銀座B1

営業時間：11:00～21:00

定休日：無休（ビルの休館日に準ずる）

お問い合わせ：03-6264-5347



「ART ZOO」 井上信太

SPORT×ART(スポーツ・バイ・アート)新豊洲アート広場



「TOYOSU RING」高橋匡太



「風の色」曾谷朝絵

SPORT×ART(スポーツバイアート)*は、新豊洲のコミュニティづくりのための活動テーマです。ココロとカラダの両面からコミュニティづくりを考えることで、新豊洲の恵まれた環境を活かし、市民にひらかれたスポーツコミュニティを目指すとともに、デザインやテクノロジーだけでなく環境意識や生活文化まで、広くアートの要素をそこに融合することを意味しています。

*SPORT×ART(スポーツバイアート)は、東京ガス用地開発株式会社が推進する「TOYOSU22」プロジェクトの一環となる活動です。

新豊洲アート広場は、SPORT × ARTの拠点として2015年7月18日(土)にオープンしました。

広場には大型パブリックアート「新豊洲パブリックアートコレクション」の3作品が設置され、子供も大人も楽しめるワークショップなども実施されました。

7月18～20日の3日間は日本のクラフトビールが楽しめる屋外ビアガーデン「Green Cross」がオープンしたほか、18日には、様々な色に変化する「光る浮き輪」を身につけて豊洲の街をパレードする「TOYOSU RING RUN」が開催され、コンピュータ制御された「光の浮き輪」の行進が新豊洲のメインストリートを練り歩きました。

Sport x Art Shin-toyosu Art Plaza

Sport x Art is a new community project in Shintoyosu. It harnesses the favorable environment of the area by thinking about ways to build a community in terms of bodies and minds. Aiming to create a sports community open to all residents, it integrates elements of art, from design to technology and awareness of the environmental and lifestyle. Shin-toyosu Art Plaza opened on July 18th, 2015 as a new hub for sports and arts. The plaza includes three large artworks from the Shin-toyosu Public Art Collection, and also hosts workshops and other events for both children and adults.

Address: 6 Toyosu, Koto-ku, Tokyo

場所：東京都江東区豊洲6丁目

主催：スポーツ・バイ・アート・イニシアチブ

(東京ガス用地開発株式会社、株式会社フコックアートセンター)



WOOD FURNITURE JAPAN AWARD 2016 ～ Harmonia 共鳴するものづくり～



「WOOD FURNITURE JAPAN AWARD 2016」は、「Harmonia 共鳴するものづくり」をテーマに掲げ、「木材との共鳴、アイデアと技術の共鳴、新たなライフスタイルとの共鳴」に資する日本の木製家具を募集し、選出するアワードです。

既存の木製家具製品を公募し選定する“セクション部門”と、メーカーとデザイナーの出会いから生まれる新たなコンセプトモデルを紹介する“マッチング部門”の二部門からなり、日本での展示に先駆け、今年1月にパリで展示を行ないました。

パリからの凱旋となる東京展では、さらにスケールアップした空間演出と共に、セクション部門20点とマッチング部門から誕生した2点の家具を対象にした各賞の審査と表彰、記念鼎談も行われました。

Wood Furniture Japan Award 2016 Harmonia: creating in resonance with wood

Wood Furniture Japan Award 2016 featured wooden furniture by Japanese manufacturers and designers, selected on the theme of harmony and their contribution to resonance with materials, ideas, techniques, and new lifestyles. It comprised the Selection Category, which included wooden furniture chosen from an open call, and the Matching Category, which introduced prototypes created out of new pairings between manufacturers and designers. Ahead of the exhibition in Japan, the furniture was also shown in Paris in January. The exhibition space was then upgraded for the Tokyo run of the exhibition, where the venue showcased 20 items in the Selection Category and 2 items in the Matching Category along with the judging, awards ceremony, and a roundtable talk.

Dates: March 4th – March 5th, 2016

Venue: Spiral Hall

開催概要

会期：2016年3月4日（金）、3月5日（土）

会場：スパイラルホール

主催：ウッド ファーニチャー ジャパン アワード2016実行委員会

*本事業は、林野庁補助事業「平成26年度木材需要拡大緊急対策事業のうち木造住宅等需要拡大支援事業のうち木材製品輸出促進事業」により実施するものです。

後援：一般社団法人 全国木材組合連合会、一般社団法人 日本木材輸出振興協会

協力：スパイラル／株式会社ワコールアートセンター、JDN、登竜門、

ELLE DÉCOR JAPAN

企画制作：株式会社アサツー ディ・ケイ

空間演出：エマニュエル・ムホー（建築家・デザイナー）



moving projection theater "Singing Queen"/ たてものおしばい「塔(クイーン)は歌う」

象の鼻テラスは、横浜市・開港150周年事業として、2009年6月2日に開館しました。

象の鼻パーク内にアートを兼ね備えたレストハウスとして整備され、「文化芸術創造都市クリエイティブシティ・横浜」を推進する横浜市文化観光局の委託により運営しています。

多彩な来場者層に向け、アート、パフォーマンス、ワークショップなど様々なジャンルの自主プログラムを随時開催するほか、併設した象の鼻カフェでは、文化プログラムに連動したメニューの提供等も行っています。

Zou-no-Hana Terrace

Zou-no-Hana Terrace opened on June 2nd, 2009 as part of the 150th anniversary celebrations of the opening of the port of Yokohama City. Functioning as a rest house, cafe and art space inside Zou-no-Hana Park, it is operated by Spiral on behalf of Yokohama's Culture and Tourism Bureau in order to promote the "Creative City Yokohama" strategies. Every year the facility hosts a range of programs for a diverse cross-section of visitors, including installations, theater, video, and workshops.

2014年 実施プログラム

① ZOU-SUN MARCHÉ

2015年6月より開始したマルシェ。「象の鼻で過ごす幸せな日曜日」をテーマに「売る」「買う」だけの関係を目的とせず、来場者と出店者、アーティストが出会い、会話をする中で生まれる豊かな気づきを大切にしています。新たな層を巻き込みながら地域と連携して育てる創造文化マルシェです。

実施回数：52回
出店店舗数：約100店舗
参加アーティスト：20組

② Theater ZOU-NO-HANA

開館当初から実施しているパフォーマンス・アートについて、2013年より柴幸男(劇団ままごと)を起用したシリーズ企画を展開。海と公園に開かれた象の鼻テラスのロケーションを活かし、ここでしか生まれない演劇作品の制作を行った。

日時：2015年12月4日(金)～6日(日)、11日(金)～13日(日)、
18日(金)～20日(日)、23日(水・祝)12:00～19:00

③ スマートイルミネーション横浜2015 Smart Illumination 2015

国内外のアーティストが最先端の環境技術を活用し「もうひとつの横浜夜景」を提案するメインプログラムの他、LEDや有機EL、発電・蓄電などの環境技術を有する企業等が自らの技術を「まちなか」で披露する屋外コンベンション「まちなか展示会」、若手アーティストや学生が光に関する作品を発表するアワード事業。個人・グループ部門と、学校部門の2部門で作品を募集する「スマートイルミネーションアワード」、スマートイルミネーション横浜のコンセプトに賛同する企業、団体、施設、商店街、市民などによる連携プログラムを展開した。

象の鼻テラス



SLOWLABEL

SLOW MOVEMENT -The Eternal Symphony 1st mov.-

象の鼻テラスの活動から派生したSLOW LABEL(スローレーベル)は、障がい者と企業や職人、アーティストが対等の立場でクリエイティブなものづくりに取り組むプロジェクトです。

スローレーベルの活動はファクトリー、パタリエンナーレへと続き、その延長として、年齢や性別、国籍、障がいの有無などを越えて、街中でパフォーマンスを展開するスロームーブメントを2015年秋に開催しました。

スロームーブメントとは、多様な人々が協働し、人や地域と繋がりがながら「多様性と調和」のメッセージを広げていくプロジェクト。

詩人・三角みづ紀が書き下ろした一編の詩を、サーカスアーティスト・金井ケイスケを中心とする様々な分野のクリエイターと市民がワークショップを重ねながら、参加型のパフォーマンス作品に仕上げます。人間の身体と先端技術融合によって紡がれるオーガニックな世界が、2020年以降の人と生命と世界の在り方を人々に問う作品です。

SLOW MOVEMENT

This project works to engage with a wide range of people and regions, and spread a message of diversity and harmony. It organizes workshops with creative people from many fields, such as the circus artist Keisuke Kanai, transforming verse by the poet Misumi Mizuki into participatory performances. In this work, an organic world woven by the fusion of physicality and the latest advances in technology inquires into life, the world, and humanity after 2020.

開催概要

開催日：2015年10月3日(土)

会場：スパイラル1F(プレパフォーマンス・関連プログラム)、国連大学前広場(青山公演)

主催：スロームーブメント実行委員会

(スパイラル/株式会社ワコールアートセンター、特定非営利活動法人スローレーベル)

共催：スポーツバイアートイニシアチブ

特別協力：太陽工業株式会社、TSP太陽株式会社、ヤマハ株式会社、ヤマハ発動機株式会社

協力：アトリエコーナス、石川金網株式会社、江東区青少年対策豊洲地区委員会、江東区

第二辰巳小学校、江東区豊洲小学校、国際連合大学、豊洲ワールドフェスティバル

運営委員会、ラック産業株式会社

企画協力：スパイラル

助成：アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)

写真：427F0T0(ヤマワキタカミツ)

